

---

# けいおん！とある弟の人生

カッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！とある弟の人生

### 【NNコード】

N1035U

### 【作者名】

カッキー

### 【あらすじ】

中学三年生の僕——平沢優は双子の姉、平沢憂と姉の平沢唯の三人姉弟。いきなりの父さんからの手紙で来年から桜々丘高校に通う事になってしまった。さて、これからどうする？

## 中学三年生（前書き）

オリキヤラが主人公なのでそれでもいい！という人はぜひ見てください！

「ゆーうー」

「ちよつー…唯姉いきなり抱きつかないでよー。」

「いいじゃんスキンシップだよーそれとも優、私の事嫌い?」

「いや……まあ好きだけど……（家族として）」

「じゃあいいじゃん!」

「それとこれとは話が……うわあ……」

僕の名前は平沢優、平沢家の末っ子で中学三年生

「助けて～憂姉～」

「ちよつと待つてて、ちよつか助けるから」

いつかじやだめだよ憂姉、これじや双子の姉、憂姉が使えないな自分で解決するしか……

「ちよつと唯姉！いい加減離れて！じゃないと俺の理性が……

本当に理性が崩壊しそうだよ！抱かれてるつとに柔らかい「あれがあたつているからホントに！」

「えー、しょうがないな～」

と黙りて離れてくれた。もうちょっと抱かれてでも……ダメだ！そんな事をかんがえちゃダメだ！弟としてダメだ！

「どうしたの？」「……、顔色悪いけど……」

「くへへ、どうしてこんなことよーあーそりだ、部活始めるの？唯姉？」

「こや～まだ決めてないよー。」

それ声を張り上げる事じゃないでしょ唯姉……

「え……もう一週間たつてるよお姉ちゃん」

「う……それ和ちゃんとこも言われた」

「和さんここまで言われたのか……」

「大丈夫だよーねーお姉ちゃんに任せなさいー。」

任せられない…………心の中で突っ込む

「お姉ちゃん流石に入ったほうがいいよ。」

おつ、ついに憂姉が動い出したか

「お姉ちゃん部活始めるの早いがここよ。」

「ううう…………憂まで」

「早く決めなあや 部活にも遅れちやうにならんこ……」

おー流石姫、どんどん言葉が出てくる

「分かったよ、一応部活に入つてみるよ

「それでこな唯姉ー！」

「えへへ～やうかな～」

昔から褒めると変わりなく、テレ(・。・)るなー

「まあそれはともかく、優、どの高校はここの

「まだ決めてないよ、本当は桜々丘高校に入るべきなんだけじね女子高だしねー」

「大丈夫だよー！」

「何で?」

「それはね~」

なんか嫌な予感が……

「あつーが女子になればいいんだよー。」

的中したよ……

「ダメだよ唯姉……」

「え? ビリして? だつてどつからビリもても、私にこてるじやん」

心にトゲが刺さる。確かに僕は女子に見えるかもしれない。けどそれを本人の前で言つなんて…… 唯姉どんだけ天然なんだよ

「確かに……」

憂姉まで納得したらダメだろ……

「とにかく明日学校だから寝るよ」

「じゃ私もー」

「おやすみー」

と言つて唯姉と僕はリビングを後にする

「こういろ大変だね~ ゆづー」

「うん、大変だよ」

唯姉のせいだ……とこつのは心の中にしまつてしまつ

「じゃあおやすみー」

「うん、じゃあねー唯姉」

と言つて自分の部屋に入つてつぶやく

「まあ……、ひつよ、まあいこや、明日決めよつー。」

そんな事を言こつゝ寝てしまった

\* \* \*

「…………ひ…………きひ」

ん?なんか声がする気のせいかな?

「起きて……」

「ひわ……」

耳がキーンとかる、初めてだな姫にやられたのは  
母の手が

「これを見て」

「ひれ~父さん達がひっ」

「うそ」

そう言つた後、手紙をみてみると「じりれな」「」と書いてあつた

優へ

えーと、唯から聞いていると思ひナビ、桜々丘高校共学になるからそこへ入れ。反抗しても無駄だよーもつ入学手続きは終わっているよ。なぜかと言つと初めて男子が桜々丘高校に入るから、らしこ。  
まあ頑張れ

優の両親より

「…………え？え————！」

「なにこれ？え？なんだよいきなり共学？桜々丘高校にはいれ？意味分からんよ。まてよ……唯姉から聞いていると思ひナビって書いてあつたけどなんで言わないんだ？」

「わづー、わづー」

「あつ唯姉！来年から共学になるって本当?？」

「え？なにそれ？」

あーそだつた相手は唯姉だそんな事知つてる分けない

「あーあーーーもつ学校いつてくるー！」

「わづーよくわからぬいけど、まだ6時だよ行つたつて無駄だよ」

そうだつた優姉ならともかく、唯姉に言われるなんてなんか悔しい

「ともかく、朝食を食べようよ、それから考へよう」

優姉がまとめてくれたのでリビングに使つたけど、そこで唯姉の部

活の事とか僕の事などで、用意をしていた憂姉以外、学校に遅れたのは言うまでもないよね！

中学生三年生（後書き）

えーと、ついに初めてしました。諦める事なく頑張つていきた  
いと思います。感想アドバイスもください！

**唯姉！軽音部入部！（前書き）**

頑張ります

## 唯姉！軽音部入部！

「お前が遅れたのは珍しいな」

「なんだよ真時、また俺を茶化しにきたのか？」

「こいつは阿部真時、小学生の時に仲良くなつた奴だ、とにかく変態  
だけど……」

「違う、違う、お前志望校決めたのかなって」

志望校の話いきなりきたよ…………」  
「されなんとか誤魔化さなければ変  
態って言われる。なんとかやり過げんなわや

「い……いや、まだ決めてないよー。」

「どうしてそこまで声を張り上げるんだ？」

「はあ？ なにいってんだ？ ほ……僕は声なんて張り上げてなによー。」

「お前はシンデレカ？ まあいいや、俺もまだ決めてないんだ、仲間  
だな。」

「シンデレって何？ とにかく僕は入っていないよ」

「おーい、優ー」

この最悪のタイミングで憂姉登場

「なにしたの?」

「おっ平沢さん、こここの志望校の話」

「あー今日決まつたよねー。」

「え? 決まつてないんじゃないの?」

あー神様仏様憂姉様どつか空氣をよんで……

「桜々丘高校だよ」

くれない……

「え? お前志望校桜々丘高校? え? なんで? あそこ女子高だろ? いやお前だからってないだろー、まさかお前女装して行くつもりだったのか? そこまで変態だとほ思わなかつた……」

言われると思つたけど、これはひどいな、唯姉と回じと言われるよりきつい

「違ひよ、来年から共学になるんだよ」

おっ、すかさず憂姉のフォロー。ありがとうござます

「あーそつたのかつお前が女装して行くつもつだつたのかと」

「お前ビームでも変態だな」

「え？ ひでーな、お前」

と言つたところで先生が入ってきたので先生ナイスー！と思ひながら自分の席に戻つた

\* \* \*

昼休み～～

「おーい、優、一緒にお風……」

「優姉一緒に食べよ!」

「いいよ」

「お前は重度のシスコンだな」

「は？ なんで？ シスコンなんだ？」

「阿部君どうして？」

「」の姉弟は鈍感だね

と言つて去つて行つた。なにが言いたかったんだ？あいつ

「ところで唯姉は何部に入つたんだろう」

「うーん、わかんない

「もしかしたら軽音部だつたりしてね」

「え？ なんで？」

「軽い音楽つて書いてあつたから、とか言つて」

「そうかもしれない」

と言つて苦笑いをした。まあこれがホントの話になるなんて思いもしなかつたけどね

\* \* \*

平沢家

「「え————————」

「お姉ちゃん軽音部に入ったの?」

「唯姉……」

「みんなどうしたの?」

「入つてほしことか言われちやつて」

「あー、マネージャーとしてとかね」

「むうーそれ他の人に言わると悔しいからやめて、あと和みちゃんにも言われた」

また和さんかよ!…と、心の中で突っ込みつつ、流石、和さん伊達に幼馴染やつてないねとも思った

「えーと、動機はなんなの?お姉ちゃん

「えーとかつ」良かつたから

絶対に嘘だろ唯姉……

「ホントはなんなの?」

「え？ これがホントだよー！」

「嘘つかない、唯姉分かつてゐるよ」

「うう……えつと軽い音楽つて書いてあつたから」

「おお……僕の予想当たつた！」

「やつぱりね」

「うう……けど入つてくださいって言われたのは本物だよーーー」

「やうなの？」

「うん、ギターの人足りないからつて言われて」

「けど唯姉大丈夫？すぐ飽きちゃうじやん」

「大丈夫だよ！なんか続けそうな気がするーーー」

「そつか……頑張つてね唯姉」

「うん！頑張るよーーー」

そう言つて僕に抱きついて来る

「やめてよ唯姉……助けてくれ～憂姉」

「ゆうーーー」

「ちよ憂姉までーきついよ唯姉と憂姉ー頼むから離れてー！」

その後、ずっと抱きついたま寝てしまつて、朝起きたらいろいろな意味でやばいことになつていたのをまだ僕は知らない

**唯姉！軽音部入部！（後書き）**

えーとテスト勉強が全く進まないんで、書きました。感想、アドバイス待っています

テストなんて消えてしまえばいいのに……はあ

## プロフィール（前書き）

プロフィールです本当はなかつたんできけどせつかくだから割り込み投稿しましたネタバレ注意！

## プロフィール

初めまして、作者ですプロフィールなので今日はゲストをお呼びしています

「俺、阿部真時です」

「僕、平沢優です」

「どーでもいいからわざと始めようぜ」

えー、チエ自分のプロフィールも発表したかったんだけどなー

「こなんところで、プロフィールなんて絶対ダメでしょ」

あーはいはいそうだね~という事でまずは主人公優君からー！

平沢 優  
ひらさわ ゆう

性別／男

年齢／14才

誕生日／2月22日

好きな食べ物／美味しい食べ物、甘いもの

嫌いな食べ物／ピーマンなど野菜全般

特技／唯や憂の真似、昼寝、突っ込み——主に唯

趣味／『じぶん』こと、寝ること、

外見／唯達に似ている。それを嫌うため髪型は唯より短かめにしているが、床屋に行くのが面倒なのでよく「平沢先輩ですか?」と学校で言われて間違われる

詳細／唯の妹で憂の双子の弟。常識人ではあるけど、たまに唯とおなじく突拍子もないことを言い出すなど天然である。よく唯の言葉に影ながら突っ込んでる。もともと桜々丘高校は行く予定が全くなくて、いきなりの父さんからの桜々丘高校共学宣言で桜々丘高校に通うことになる。自分はよく姉妹好き（システム）とよく言われるが自分からして見れば全くシステムだと気づいてない。よく平沢姉妹に抱きつかれる。結構な純粋でなんとか理性を保ってる。勉強は唯程ではないが、できないだか唯とおなじく「やればできる子」絶対音感　相対音感の持ち主だがあまり気づいてない

高校ではギター担当、声が高いのでボーカルもしたりする。

関係（中学3年生時）

平沢 唯——突っ込んだりするが、信頼している、大切な家族  
好き

平沢 憂——昔から信頼しきっている　大切な家族　好き

秋山 鶴——おなじく突っ込みやなのでけつこうの気が合つ 知り

合い

田井中 律——飽きれているが、面白いと思つていて 知り合い  
琴吹 紗——突つ込みましょう!と思つていて 知り合い

中野 梓——あまりあつたことがないけど、「ある時」であった  
ので、知り合い

真鍋 和——苦労を分かってくれる数少ない人の1人 友達

まあこんなところかね~

「そうですね」

「何か設定多くね?」

そりや主人公だからね

「じゃ俺はどうなんの?」

阿部真時のプロフィールはこちら!

あべしんじ  
阿部真時

性別／男

年齢／14歳

誕生日／10月14日

好きな食べ物／ご飯、焼肉

嫌いな食べ物／たけのこなどきのこ全般

外見／金髪の美青年なのだが後述のせいでもない一応関西出身  
詳細／確かに結構な美青年なのだが性格が悪く変態でナンパしたり  
変なことをよく妄想したりしてゐるにやけでる顔がキモい（オタクで  
はない）いつも優が「その性格直せばモテる」と言つてゐるのだが  
なかなか性格が  
直せない桜々丘高校に入るかは作者の気分などで決まる

関係  
平沢 優———けつこう氣軽に話し合える 親友

平沢 憂———しゃべつたりするがあまり仲良くない 知り合い？

鈴木 純———幼馴染すんごく仲が良い 親友

以上でした

「ちょっと待て作者！なんでこんな俺だけ短いんだよ！」

主人公じゃないから

「えーそんな理由で？後、桜々丘高校入るの気分次第つてどうゆう  
意味だよ！」

そのままの意味

「始めなめやがつて！今にみてるよチクシコウ」

ハイハイ、ヒルヒルとでプロフィール終わりました。今後オリキヤ  
ラは増やさない予定ですが、増えるかもしれません。その時はまた  
プロフィールあるんでよろしく！では本編で…！

「「「よひしへお願こしまかー！」「

## プロフィール（後書き）

終わりました。

実を言つともうテストなんてどうでもいいやーパターンにはいつたので、また続きを近いうちに書きます！よろしく！

ギター購入！（前書き）

感想アドバイス待ってます！

## ギター購入！

「 ウハー。」

「 なに唯姉、つてうわー。」

いきなり抱きついて来る唯姉、慣れてきた自分が怖い

「 お願いがあるんだけどー」

「 なに唯姉？」

唯姉がもじもじしながらおつとじてる時は大抵お金貸してくれ

「 お金なら貸さないよー。」

「 えつーまだ何も話してないよー。」

「 唯姉がもじもじしながらおつとじてる時は大抵お金貸してくれ  
さことかだから」

「 ひどーー。」

「 これが事実だから」

「 ハハ……」

だからって上田遣いやめて、ホント僕はその田に弱いから。ああー  
もうこーーやー。

「いぐらじーいのー。」

「え? くれるの?」

と言ひて顔を上げて笑顔になる僕はこの笑顔にも弱い

「何円?」

「えつとね~5万円!」

え? 5万円? それって僕のお小遣のえーと……お年玉合せでめりあつたりる額じやん!!

「『めん、流石に5万円は無理だよ憂姉に頼んだら?』

「えー、わかつたよー」

唯姉、そりやないだろ5万円で何が買えると思ひ? マスクメロンなんて3個ぐらい買えるし、焼肉なんてパーティーできるぞ絶対だから、憂姉でも持つてないとと思う。例えが変すぎたかな? 「めんなさい。つて一体だれに謝つてんだろ……

\* \* \*

明後日

「つて」とギター買っちゃいましたー。」

「うわーいとでなの? 唯姉? と軽く突っ込んでおこつ

「お姉ちゃんのギターなんで買ったの?」

「可愛いからー。」

言ひやつたよ唯姉……もつと考へないの? つてこのギターまさか

……

「え? まさかこれギブソン・レスポール? スゲえじゃん! 唯姉これ  
高いんだよ!」

つてあれ? 唯姉なんでこんなに高いの買ったんだ?

「唯姉なんでこんなに高いの買ったの?」

「え? 友達が安くしてくれたから

「すじいね。お姉ちゃん

へー友達が安くしてくれたからかー、つてえー! 安くしてくれたの?  
? どういう友達を持ったんだ? 唯姉! あと憂姉! その反応違うと思  
うよ……

「おーなんどーのギター知つてるの?」

「僕の好きなバンドの一人が使つてるから」

「くーそうなんだー」

聞こえたんだからわひとこ返してくわ……

その夜

「えへへ～可愛いな～持つてみたりして……ねあー//ゴージシャン  
つぼい！」

うんー、うなじによ姉、隣の部屋だからよく聞こえる。あとギター  
ひいたら……

「サインの練習しなわやー」

あーもう、仕方ない注意しにこへか…

「唯姉「お姉ちやんー、うなじ……」

「ねえねえ、//ゴージシャンっぽくない?」

「確か//ゴージシャンっぽくー……」

だけど……

「お姉ちゃん、こ、コージー・シャンになつたいなう、ギター弾けます？」

「僕もそつ細い」

「ナエだよな、だけどなんか可愛いくらんなか見とれやつて」

「ナエもつ遅こよ、寝たらいいつへ」

「うそ、うそ」

「いつひげ芝でギターを入れるひつしたんだろ姉……」

\*

\* \* \*

「優、起きて」

「あと5分……」

「一一度寝はだめだよ」

「わかったよー」

と言つて起き上ると急に憂姉が抱きついてきた

「うわっ…どうしたの？ 憂姉」

「なんかお姉ちゃんに似てきたからつこ…」

「あーそういう最近切つてないもんなー髪」

確かに髪長くなると唯姉達に似てくるけど、理由になつてないからね憂姉、いつも唯姉ほどじやないけどして来るし、あと憂姉、「あれ」が当たつてるよーうん、やっぱり憂姉のほつが胸がおお…ダメだ！ホントにそういうこと姉弟としてだめだから！自分よ、そういうふうに考へることはよそつ。うん！その通りだ

「憂姉、あのー離れて……」

「優あつたかーい」

「だめだ！人の話聞かなくなつてる！これはもう止められない！」

その後10分ほど抱きつかれた、これじゃ早起きした意味ない…その後学校に行く準備をしてると

「あー唯姉に国語辞典かしたまんまだった」

返してもらわなきや、と思い唯姉の部屋に行くと、憂姉がいた。多分起こしてるんだろーな

「唯姉～借してた国語辞典返して……」

え？唯姉の部屋……なにこの風景……ギターと

「添い寝……」

憂姉と言つタイミングが同じだったおーすごい、ってか何してんの！唯姉昨日ギターを布団の中にいれてたのはそのためか…

その後学校の準備とか唯姉のギターの話とかで、またまた学校に遅れそうになっちゃったのはもうあれだね決まってるようなことだよね！



## ギター購入！（後書き）

最後グタグタになっちゃいましたねすみませんホントはテスト終わってから投稿しようと思つたんですけど、ヤル気が全く湧かなかつたんでつい…とにかく僕も優もいろいろこれからも頑張るんですよしく！感想、アドバイスも待っています！

## 姫のやうな優（前書き）

5話目です！感想、アドバイスよろしく！今回短かめです

## 憂姉のよひな優

5円になつたそろそろ誕生日なのだがそれより前に定期テストがあるまいいろいろある時期なのだがそれよりも……

「ホントにそろそろ髪切りにいった方がいいかもしない」

「やうだよ、ゆうー私が切つてあげよつか?」

「だ……大丈夫だよ」

「えーしょうがないなー」

しょうがなくないでしょ!

「けど、ホント私達似てるよね」

「やうだよねーあつそうだー」

唯姉どうしたんだろ? こきなり髪型をいじりはじめた。まさか……

「はー、憂の完成! 次はゆうーの番だよー!」

その通りでしたーこの前は唯姉のまねだつたよね!

「はい」

笑顔でゴム渡されたら、断れないよーってかどーから出てきたんだ  
よ唯姉!

「分かつたよ

と書いて「ゴムを持った。僕はこれをつける時、男を捨てる事になつてしまつ。けど唯姉と憂姉の笑顔には勝てないしなー、もつといつけよひじやないか

「うわ～す～く似てる。と言つか私だよ。憂

傷つく「メンツあつがとうわこます。泣いていい?

「泣き顔も憂そつくりだねー」

唯姉やひつと傷つく言葉を書つてくれるじやないか

「よし!決めた!優、明日その髪型で行く事ー」

「え?え―――.」

絶対嫌だよー絶対嫌だよーこれ大事だから2回書つたよー

「ダメ?」

「私も嘘うそんな反応されるか見てみたい…」

唯姉と憂姉上田遣いやめてホントにちよつとの田だけは

「分かつたよ

「やつたー」

やばいかもしれない……

\* \* \*

翌日

「ホントにこの髪型で行へるの？」

「当然だよー。」

唯姉はうだつたのか……

「ほひーー早く行かないと遅刻しちゃうつよー。」

「「はーーー」」

歩いてるとみんなさんが僕達を見てくるそりゃね同じ顔をした外から  
みたら、3姉妹がいる訳だからそうだろうけどなんか照れるなー

「今日はね～……」

唯姉は相変わらず部活の話をしてくる、打ち込めるのが出来たのは  
いいけど練習の話が出てこない練習もしようよ唯姉……

そんな事を話してると別れの場所がきた憂姉と一緒に歩く。これ程  
にている双子の姉弟はいないだろう  
とか話しながら着いた。さあ心の準備のをしなければならない覚悟  
を決めるんだ僕！

「お…おはよ！」

入ってきた皆は僕に唖然としていたそうですよね～憂姉が2人もい  
るんだから

「え……どうしたの？」

と言つ一人の女性が近づいてきたのでその後につづいてぞろぞろと  
質問してきた質問の大半はこれだ

「どっちが平沢憂でどっちが平沢優？」

だった答えようとしたがどっちだか賭けをしようつて事になつてしまつたその時だ

「おーっす」

真時がやつと来ててくれたあいつなり

「おまえらー平沢優はどつちだ?」

分かつてくれない……お前と俺は昔からの親友じゃないのか?…とその時

「優、どじつよ!」

憂姉が聞いて来た

「大丈夫だと思つ」

そんなさうじ心配する言葉を言つてどじつする?…と思つたがまたまたその時。男子と女子の田がじつちに向つた

「ちよつと憂姉?」

抱きついて来た。きつと心配してると思つたんだらうけど学校でしかも階の前でちよつと男子の田がやばい

「おー男子共……」のクソシスコソ野郎を……殺せー!…

その真時の声と共に男子が襲つてきた。やばいそう直感的に感じ逃げる

その後授業中に殺氣に襲われ、休み時間は追いかけられる。当然体力に限界を感じ最終的に半殺しにされたのは言つまでもないよね!



## 姫のやつな優（後書き）

この主人公なかなかキャラがおさまらないホント苦労します。けど書いてて楽しいんで書いてます。まあどんどん書き書いていくんでこれからもよろしく！

## 勉強会一（前書き）

感想、アドバイスよろしく

## 勉強会一

「床屋、長期休業だつて」

髪を切るため床屋へ行つたが、不幸な事に長期休業だつた、はあ  
当分この姿か…

「ゆうー 良かつたじやん」

良くない…ってなんで憂姉、そんなにホッとした顔になつてんの?

「ところで憂姉、来週の中間テストの勉強見てくんない?」

「いいけど、どうして?」

「分からぬい所があるんだけど」

「分かった。お姉ちゃんは勉強しないの?」

「大丈夫だよ~」

とか言いながら自分の部屋にいく、絶対大丈夫じゃないでしょ! ほ  
ら、憂姉が心配そうな目でみてる~この目を見るとこっちも心配になつてくるんだよ~

「唯姉、ホントに大丈夫?」

「ホントに大丈夫だよ~」

もつ僕は唯姉を止める事は出来ない。 そつ直感で感じその通りになつてしまつた、唯姉大丈夫かな…

\*\*\*

憂姉に勉強を教えてもらひつてソビングで会話してると

「ジャジャーン」

唯姉がいきなり本を出してきた。何々…… 「サルでも分かるコード？」なんだそりや

「ギターのコード表が載ってるんだよー」

「ああギターね、それって見せる必要あるの?」

「あるよー」

「何があるの?お姉けやん」

憂姉が分からぬのなら僕にも全く分からぬ

「それはね…」

おーこれってなんかデジャヴ

「憂かゆうー、一緒にギターやんない？」

第十一章

これは何なんだろ絶対僕が買わされるパターンだ！そう残念な事に決まってるんだ！

「うーーーダメ?」

「うん。家事とかやるからギター やる暇あんまりない」と思つ

「ハーフマニアがいるぜ？」

平常心だぞ平沢優、平常心なんだ！

「僕もだ  
…  
」

そんな上田遣いで僕を見ないでくれ！頑張れ自分！負けるな自分！しかし…その上田遣い、わざとやつてるんじゃ……もうダメだ…

卷之二

「本当？ありがとう」

負けた……負けてしまった。上目遣いの天才平沢唯に

「だけど中間テスト終わってからね」

憂姉が同情の目で僕を見てくる、頼むから見ないでくれ！

そういう事で、僕のギター人生は始まつた……（始まつてしまつた）

＊＊＊

／中間テスト返却日翌日

「良かつた」

なんとかテストで補習を回避して補習を受ける真司の肩をポンと叩くと

「お前は俺の仲間だと思ったのに……くそー」の男女野郎に負けるなんて、「

とか言つて泣き出した。男女ってなんだ？よく分からぬいけど、酷い、真司をほつといて家に帰る。今日は憂姉が先に帰つてる筈だ。そう思いながら家に着く、あれ？靴が多いお客様かな？

「ただいま～」

「あつ、帰つてきたおーいゅうー」

みんな唯姉の部屋にいるのかな？

「ハハちきなよ~」

「どう唯姉に言われたので唯姉の部屋に行く

「あれ? 唯が2人? 妹さんもう一人いたのか?」

「あつそりだつた、髪切つてないんだ!」

「違つよ~弟の優だよ」

「　　「弟――――.」　　」

その場にいた唯姉の友達全員がおどろく。とくに黒髪でストレートの女性は部屋の端に行ってしまった  
これはこれで何か悲しい

「ホントに弟なのか?」

カチューシャをかけた女性が聞いてくる

「はい、男です」

「驚きだわ!」

お嬢様っぽい人がいまだに驚いてる

「で、唯姉達は何してるんですか?」

「へ? 勉強会だけど……」

なるほど……だがカチューシャのひとは漫画読んでるよ

「君は本当に男なのか?」

黒髪でストレートの人が緊張しながら話しかけてくる緊張する必要あるのかな?

「はい、そうですけど」

「「「凄いな……平沢3姉妹」「」

「姉妹じゃないです!姉弟です!」

そんな事に意地を張つてると憂姉がきた

「虽然わん、買ひ置きのお菓子ですけど、良かつひじりつけ」

「「「出来た子だーーー」「」

心の声がこちらにも聞こえる。まあきっと唯姉と憂姉の違いつて凄いと思つてるんだろうな

その時ケーキの匂いがした

「あれ?ケーキの匂いがする…」

「ケーキ?全く匂いがしないぞ」

と、カチューシャの人は言つが

「え？ よく分かつたわね、」

そういうお嬢様っぽい人がケーキを出してきた当たりだな

「はい、匂いがしたんで」

「流石私の弟」

と言つて抱きついてきた。唯姉に褒められると複雑な心境だなとおもつたり、いちいち抱きつくと面倒だといつも思うんだけど唯姉は疲れないのかな？あと普通女子が男子に抱きつくなんてあまりないけど、あの3人はあんまり違和感ないんだろーな。などと考えて自分つて余裕だなともおもいながら。まあ要するに誰でもいいから助けて！と言つた事

その後、軽く質問された後、憂姉のところでゲームをしていると途中で力チューシャの人が乱入してきた。ふざけすぎて追い出されたらしい。そして、帰りまでゲームをやってると黒髪ストレートの人ガ「馴染みすぎ！」と言つて突っ込んで来た。その時親近感が湧いたのは氣のせいではないな。絶対に。

結局、名前も聞かなかつたなと思いながら見送る。まさかこのひと達が軽音部の人達とは知らず、しかも今後深く関わっていく事も知らずに……



## 勉強会ー（後書き）

初めて唯以外の軽音部キャラ出せました。あづにゃんもそろそろ出る、思います。が作者の文章力がないのであまり出せないかもしれません。あづにゃん以外の軽音部キャラはまた出るんで、ではまた次回

## 優！ギター購入！（前書き）

7話目です。感想アドバイスなどなんでもいいのでください！

## 優！ギター購入！

土曜日

「ねえゆづー」

突然オレンジジュースを飲んでいた僕に唯姉が話しかけてきた

「なに唯姉？」

最大級のスマイルで返す。すると

「ギター買いに行こー！」

あちらも最大級のスマイルで返してくる。え？なんでギター買うんだ？

「唯姉、なんでギター買いに行くの？」

「忘れちゃったの？ほら、定期テスト前だよ～」

定期テスト前？えーと、まさかあの話じゃね？

「まさか……リビングで話していた時の事じや…………」

「うんー…そうだよー」

え…あの話本当に買ったの？もつ忘れているのかと

「ゆづーさあギターを買いに行こー！」

ちょっと引っ張らないでくれ！なんでこりう時だけ力が強いんだ：

\* \* \*

### ギター店

「はい、ついに来ちゃいました」

「速いな…流石小説」

「ゆう一何か言つた？」

「いや何も」

「へ～いろんなギターがあ～…」

僕達はついにギター店に来てしました

え？何このギター、ツインネックって書いてあるけど、弾ける人って手が4本あんの？

安いものから高い物までたくさんあって、凄いと思う。

「みて見て」

唯姉もはしゃいでる、どうしたんだろ

「なに、唯姉？」

唯姉の所に駆け寄ると唯姉は1つのギターを見つめていた

「どうしたの？ 唯姉？」

思ひ思ひ置してみぬ。すれど、一々答へか帰つてきた。

「愛し」

でました唯姉の可愛い発言、なんでも愛着がわく癖だ。まあ僕も同じ何だけど……

「確かに可愛い……」

この時に僕は唯姉の弟なんだな」と改めて実感した

一 値段は8万円か

正直言つて、高い。僕の今のお小遣いじゃお年玉があつても足りないかー

「大丈夫！私が出してあげるよ！」

「ホントー...こくへりべりこつ..」

「えつとね...」

そつ言つて財布を確認する

「3万円かな...」

3万円か...よし、なんとか買える

「じゃあこれにするよー。」

と言つて店員さんにこのギター買いたいと言つた後、会計の時店員さんが唯姉を見て結構ビビつてた何でだる?

「やつたねーゆうー」

「うふ、ギター選びに付き合つてもらつてありがと」

「いやいや、大丈夫だよー」

あれ?何か大事な事を忘れているような気がするけど...まあいいや

\* \* \*

平沢宅

家には憂が夕食の用意をして待つててくれた流石憂姉

「よかつたね、お姉ちゃん。ギター仲間ができる」

「うん。」

「うーん」

「どうしたの？ 優

「いや～何か大事な事を忘れているような気がするんだよ」

「気のせいじゃない？」

「わうかもねー」

そんな事を語り笑っていたが…

「やばい…。ギターだけ買って後のギターを弾くための道具を買

つてない！」

「「え？」」

その場にいる2人が驚く

「ちょっと戻つてくるから！」

そつと戻つて早々に部屋を出た

＊＊＊

15分後

「買つて来たよ……」

今回は流石に疲れた

「あれ？ 皆もひ食べてんの？」

「うん…やだよ」

「嘘だ。・・・・・食つてから行けば良かつた」

腹がなつてゐる

「まあいいや、今から食べられるんだし」

と書いて座ると

卷之三

「え？ 唯姉もう終わり？」

「うん、そうだけど……」

「ごめん、私も」

「え? と言つ事は1人で食つのか . . . . 何か寂しいな」

と言つて誰かいてほしによアピールしたけれど全く気づいてくれなかつた。何で . . . . .

「はあ、何か寂しいな」

今年最大級の虚しさがあつた土曜日だった。これからは人と合わせようという事も学んだ。皆もこんな事にならないようにしてね！

## 優！ギター購入！（後書き）

7話目どうだったでしょうか 楽しんでいただけたら、嬉しいです。  
どうぞ次の話もよろしく！

## 夏休み前日！（前書き）

期末テスト終わったー！…ってことで、これからも続けて行きますんで！

## 夏休み前日！

中間テスト、期末テストも終わり季節は夏、蝉の声が夏を感じさせ  
るな～

「ゆづー私夏休み合宿行くんだ～」

「え？ やつなの？ いいな～」

「えへへ～いいでしょ～」

と言つ事で夏休み前日

「つむか唯姉、まだテストと添い寝したりしてるので？」

「うん！ 最近はギー太とも一緒に寝るよ

この前の追試でとつた奇跡といつても過言ではない唯姉の100点、  
今でもギー太と名付けたギターと寝たりしてる。そこまで嬉しかつ  
たんだろうな、憂姉は「今度は答案と添い寝！？」って言って驚い  
てたけど僕には分かる！100点の凄さが！嬉しさが！分かるよ唯  
姉！

「優、最近ギター上手くなってきたね」

「そりかなか～唯姉の方が上手こと思つよ

「そりかなか～ありがと～えへへ～」

照れる唯姉、可愛いな～（姉弟としてだよ！決して女性としてじやないから～）

「ゆう～今せりげなく酷い」と思わなかつた？

「や・・・・・まあなんの事でしょつか！」

「ふーん、まあいや」

危ない！憂姉がいない今唯姉を止める事が僕には出来ない！と、そんな時

「あ、和ちゃんからだ」

「和さん！」

おお一凄い、唯姉を止める事が出来るもう一人の存在がら今メールが来るとほー

「余つてるお菓子があるから、遊びに行くなつてに持つてくんなつて

「え？遊びに来るの？」

「うん、そうだよ。憂が友達の家に遊びに行つてるから、夕食作ってくれるんだつて！」

「へーそつなんだ

とかいいながらも心でガツツポーズする僕、よし、これで唯姉なんかやられる事はなくなるし、唯姉が夕食作る事はまずない！

\* \* \*

数時間後

「やつまー和ちゃん」

「こひか、和さん」

「じつしたの優、疲れてる顔してるわね」

「ちよっと色々ありましてね . . . . .

和さんがすぐ来るとおもって油断してたら、女させられた  
やつまーは、優姉から少し離れた所へ行つて言われた  
やつまーは、優姉から少し離れた所へ行つて言われた

「ちよっと優、こひか来て

「え? なんですか?」

「ちよっと優、また唯に女させられたでしょ?」

「え？わかるんですか？」

「当たり前よ、何年付き合っていると思ってるの？まあ男なんだし断れる力を持ちなさい」

「はい」

「まあ頑張りなさい」

そんな事を言つてくれた、ありがとうございます

「和ちゃん今日まだいつする？」

「今日はじ飯作りに来たのと、唯の勉強を見に来たから先に勉強しながらさー」

「えー、先にじ飯がいいー」

「ダメよ」

「分かつたよー」

と言つてしぶしぶ和さんについて行く唯姉、頑張つて！

「何思つてゐるのよ優、一緒に勉強しなさい」

「あ、やっぱり

つてか、心を読むなんてさすが和さんだなと思ひながら後を追つた

\* \* \*

勉強後

「「は～疲れた～」」

「何言つてゐるのよ唯達、たかが3時間じゃないの」

和さんあなたは鬼ですか？

「鬼じゃないわよ」

読心術の天才だ…

「ま…まあとにかく飯食べれるからいいんじゃない

「そうだね～」

なんとか話を逸らした…ダメだそんな事を考へると、読  
心術で見破られるダメだ！

「待つてて、今作るから」

「「はへこ」」

「あなた達本当に似てるわね」

「えへへ～そうかなー」

凄く傷つくなあ似てもじょつがないか

＊＊＊

数十分後

「出来たわよ」

「うわ～美味しそー」

ホントに豪華だなー憂姉と同じぐらい美味しい

「ありがと、わあおかわりもあるからどんどん食べて」

「はーい」

と言つて食べるといれがまた美味しい

「美味しいよ～和ちゃん」

「ホントに美味しいです」

「2人とも、ありがとうございます」

そんな事を言つた後、自分の行く高校つまり桜々丘高校はどんな所か、唯姉は普段何してのなどを聞いて夕食タイムはあつという間に終わった

「じゃあ私はこれで」

「えー、泊まつて行つてよー和ちゃん」

「ダメよ制服のままだし

「大丈夫だよー!」

と言つて和さんに抱きつく唯姉

「ちょっと唯? 優? ビンしたの?」

抱きついた時、僕もその反動で和さんに抱きついてしまつた、離れようとしたけど体が動かない

「全く…………」の3姉妹は本当に人に抱きつくるのが好きよね

「姉妹じゃないです姉弟です!」

「その体制で言つても説得力ないわよ」

「う…」

たしかに、和也と抱きつぶと気が抜けっこな…

「妹じゃないです！」

「ほこなこととかく離して」

「嫌です」

「あ、なんのよ」

「僕にも分からないです！ただ、なんかいいなって思っちゃうん  
ですね」

「んへ、昔から抱きつぶすべやね、おまわり、寝て寝てみせつけられ

「…」

「無駄に抱きつぶてる力が強いわね」

\* \* \*

## 憂視点

「ここにちは、平沢憂です。昨日は純ちゃんと勉強会でついでに泊まりしてしまいました。お姉ちゃん達、大丈夫かな？」

「お姉ちゃん、優ただいま、夕食大丈夫だったー？」

「あれ？返事がないまだ寝てるのかな？」

「お姉ちゃん達ー」

リビングには和さんも混せて3人で仲良く眠っていましたお姉ちゃん達は可愛いです

「唯姉…………やめて…………」

優はどんなゆめを見てるんでしょうか、何か不思議ですね

\* \* \*

夢の中

「唯姉、和さんまでしみつと待つてください」

「逃がせないわよ」

「絶対、女装させあげるんだから」

その笑顔が凄く怖いよーあと、何か唯姉キャラ崩壊してるー

「う……うわー——————」

その時にもう絶対に女装は断るーと思つたんだけど、夢の中だったんで全く覚えてなかつたですー

## 夏休み前日！（後書き）

今回はちょっと懶めにしてみましたが、どうだったでしょうか。感想アドバイスなど是非ください。次回からは夏休み編です！ではまた次回

**夏休み！（前書き）**

9話目です！よろしく！

夏休み！

「暇だ～」

夏休み真っ最中。 本当なら唯姉と一緒にだらけてるはずなんだけ  
ど、あいにく今日は軽音部の合宿りじく、今日は憂姉と僕しかいな  
い、唯姉がいないと結構暇だね～

「優、外行つて来たら？」

憂姉が話しかけて来た

「何で～」

「だつて最近ずっとだらけてばっかりじゃない

そうだった。唯姉と一緒にだらけてばっかりいたんだつた

「お姉ちゃんは合宿で活動してるんだから少しは優も何かしようよ

「うーん、だつたら真司でも誘つてどつか行くか？」

と言つて重い腰をあげたあ～眠いな～

「優、いっつて来ます」

そう言つて出掛けたのだが・・・

「え？ 遊べない？」

「ああ、夜から用事があつてな、」めん無理だわ

「やうか…分かった

と暫つて帰らうとしたら

「ちょっと待つてー！」

「何？」

「これ見てくれ！」

「ん？ これは…ライブのチケット？ 何でお前がこんなものを？」

JANN系のライブチケットだ日本のは今日だ

「友達からもらつたんだけど、俺には見にいけないから、だから  
やるよ」

「ホントに？ ありがとー！」

「どういたしまして！」

「じゃあね、サンキュー！」

そう言つて真司にお礼を言つてライブ会場へ急いだ。いや、得した  
気分だなーそう想しながら歩いていると信号で人とぶつかってチケ

ツトを落としてしまつた

「大丈夫ですか？」

「え？ あ、はい」

見た目中一ぐらこの身長、長い髪をツインテールにしていた。うん、かわいいね唯姉が見たら絶対抱きつく程の可愛さだ。あれ？ 背中に何かある . . . . . あの形は… ギター？

「ギターやつてるの？」

「やつですけど… もさかあなたもやつてるんですか？」

「うん！ お姉ちゃんの影響で」

意外だギターをやる人は見かけによらないってことだねそう思つているとツインテールの少女は僕のライブチケットを見ていた。どうしたんだろう

「このライブ行くんですか？」

「へ？ うん、行くけど…」

「奇遇ですね！ わたしもそのライブ見に行くんですよ」

「これまた意外、ぶつかつた人が同じ目的地なんて。運命を感じるな～

「良かつたら一緒に行かない？」

「いいですよ、私の名前は中野梓中3です！」

えー中3なのー！

「えっと僕の名前は平沢優同じく中3です」

「同じ学年なんだね、よろしく優さん」

あ……さん付けされた……僕、女の子だと勘違いされてるよ、絶対

「えっと…………優さんって僕って言つたんだね。今時珍しいと思つよ」

「うん……」

言えなかつた、僕が男だつて、早く言わなきや行けないんだけど……

「優さんって高校何処に行く予定なの？」

「えっと桜々丘高校に行く予定」

「え？ そつなの？ 私も桜々高校何なんだ！ なんか運命的なのを感じるね」

なかなか話せない……そんな訳で、話せないままライブ会場についてしまつた。ライブをやつてる人達は一言で言つと、「すごかつた」唯姉より絶対に上手い！と思つ。中野さんはずっとシンケンな表情でライブに聞き入つていた、すごいな…………とか思つたり音楽に聞いたりしてると、何時の間にか終わつてしまつていて。帰り道で中野さんとメールアドレスを交換したりした

「優さんほどのバンドが一番良かつた?」

「え? 僕はやっぱり最初のバンドかな」

「私は10番目のバンド」

など会話してると、僕の家についた

「じゃあ、僕、この家だから」

「うん、じゃあね優さんまた今度」

と黙つて家の扉を明けると

「ただいま」「ゆづー」「うわー。」

いきなり帰つてきていた唯姉が抱きつく

「唯姉ちよつと助けてキツイおまけに精神的にもきつい!」

「大丈夫だよー」

大丈夫じゃない!けど、まあいいか今は今で楽しもう!だけど何か伝えるのを忘れてたと思つのは氣のせいだらつか…氣のせいだと願いたい!





## 夏休み！（後書き）

どうだったでしょうか。間違い、感想、アドバイスなどいろいろしく

## バカنس！1（前書き）

注意！

今回は原作は全く関係ありません！完全オリジナルです

## バカنسス！1

「楽しみだねー・ゆづーと臺！」

「うんー・そうだねーお姉ちゃん」

「うんー！」

「ここは飛行機の中だ。こんな飛行機に3人でいる理由はまあいろいろあるんだけど、1週間前に遡る。そこから話そうー。

1週間前

「ゆづー大ニユースだよー！」

突然唯姉が帰ってきて言った。どうしたんだろう？

「何？ 唯姉」

「なんと……何とですね……」

じらす唯姉、気になるなー

「早く言ひてよー」

「分かつたよーしようがないなー。なんとー我が家平沢家は旅行する事になりましたー！」

「へ？」

いやいやいや、ないないないない。いきなり帰つてきでこれはない  
ないない！そしてあり得ない！

「唯姉悪い」「冗談はやめて」「本当だよ…」…………え？』

ホントなのか？憂姉まで驚いてるよ？

「どう言つ事なの？お姉ちゃん」

憂姉も聞いてきた、そりや気になるよね

「実はですね…

唯姉の話が長いので簡単に説明しよう。ムギちゃんと言つ軽音部生  
がクジ引きで1等を当てて3人分の7泊8日の券を当てるらしいけ  
ど、その時は旅行らしく、自分は行けないらしい。だからその時会  
つた唯姉に渡した。僕が言いたい事は一つ！運よくすゞぎ唯姉！

…………と言つ事なのです…』

「長つたらじいは酷いよやつー

「長つたらじいは酷いよやつー

「けどどうするの？今はお父さん達だつているよ3人分しかチケッ  
トないじゃん」

「うーんそれは…」

「それは大丈夫だ（よ）ー。」

いきなりのお父さん達の出現！

「僕たちはその時パリに行つてるよーだからいつてらっしゃーい

仲良し夫婦だな…ホント

「ありがとーお父さん、お母さん」

「いやいや、じゃー！」

と黙つて去つて行つた

「良かつたね！お姉ちゃん、優ー！」

「うんー。」

と言つ訳で冒頭シーンに戻る訳だ。ちなみにホテルとかはムギちゃんと言う人が別荘を用意してくれるらしい。何から何までありがとうございますー！

「しかしあ姉ちゃん、優。寝坊したから危なかつたよ

「「「めんなさいー。」」

憂姉には頭が上がらない。

「もつ少しでつぶよー！憂ー。」

「やうだね！お姉ちゃん」

飛行場が見えてきた

「ゆーー楽しみだね！」

「うん！唯姉」

ハプニングがおきなければいいんだけど。お願ひしますよ唯姉！

## バカنس！1（後書き）

ついに始まりました！バカنس編！軽音部キャラクターもでてきますのでよろしく！感想、アドバイスよろしく！

## バカنسス！2（前書き）

バカنسス編です！

## バカنسー2

「で……でかい……」

「お姉ちゃんー！」なの？ホント！」

「うん！ホントだよ」

ただいま飛行場から別荘についたところ。つてか唯姉何でこんなに大きなところなのに、びっくりしないんだ？

「唯姉、どうして平氣でいられるの？」んなに大きいのに

「あーそれはね一合宿の時にこれくらい大きな別荘借りたんだよ

す！」こな唯姉！

「これでも小さい方つてムギちゃんが言つてた

「！」こなムギちゃんー！お姉も言葉が出てないよー

「早く部屋に入ろう！旅行は1分、1分を大事にしなきやー！」

「そうだね、憂姉も早く入るわ」

「う……うん」

なかなか声が出せてなかつたな憂姉

\* \* \*

「 なかもでかい！！」

なかに入つてみると、これまででかいベッドや部屋の数々、ムギち  
ゃんありがとうございます

「 3人入るだけなら広すぎるね」

「 ホントだよね」

「 大丈夫だよー」

唯姉、あなたはお金持ち耐性がついてしまったんですか · · · · ·

「 別荘の周りにビーチがあるのもすごいね」

「うんー、合宿も周りに海があつたんだよー。」

「合宿の時に海 . . . . . まさかー！」

「唯姉、合宿の時はあまり練習してなかつたんじゃ . . . . . 」

唯姉からギクッとした効果音が聞こえる

「まあかー唯お姉ちゃんはちゃんとやつてたよー。」

「お姉ちゃん . . . . . 」

憂姉までもが唯姉に大丈夫なのサインを送つていた

「はあ . . . まあいや、とにかく次ビーフするわー。」

「私は . . . . . お姉ちゃん達がする事なら何でもこよ

「じゃあ僕は . . . . . 「はーはーーおよぎたいでーす」  
・ · · 唯姉

散歩でもつよひーって言つたのに唯姉 . . . . .

「いっけど僕水着持つて来てないよー。」

少し抵抗しよひーと思つて言つたのだが . . . . .

「ふつふつふうー覧あれー」の水着をー。」

「あー！それ僕の水着ー。」

「どうから持つて来たんだそれ！」

「ほひ～憂のもあるよ～」

「ありがとう、お姉ちゃん～」

「素直に喜べるっていいな

「ああ泳ぎに行こうぜー。」

唯姉が男っぽい口調になつて話す。よほど機嫌が良いな

「でもね、唯姉」

「どうしたの？」

「こりで着替えよつとしないでくれます？なんて言えるわけないでしょつーどんな中学生だつてすゞくいいイベントかもしれないけど、姉弟だし。けぢやつぱりこいつって僕一ダメだよそういう気持ちをもつちやいつも言つてるけど人間としてマジでダメですから！ホントに

「トイレにつて来る

「うん、行つてらっしゃい

と言つてトイレへ向かう。危なかつた、ホントに危なかつたよ、あとちょっとで理性が崩壊するところだつた。いやマジで危なかつた。これ大事だから何回でも言つよ。

と言つわけで、終わつた頃を見計らい唯姉達のいる所に戻つた

「やつー わざに行つてるよー」

「うん…」

と言つ訳で僕は一人残されちょっと寂しい気持ちで着替えて唯姉達を追いかけた

\* \* \*

「どうしたの？優

「いやね、ひょっと躊躇つて

憂姉達がと言つたしの言葉は一生口にしない言葉である。眩し過ぎる、あれだね、もつと胸の辺りがね、いつもより全体的に唯姉達が女子に見える（もともと女子だけ）

「ウービーチバレー ボールしようよー」

「3人しかいないけどできるの?」

「できるよー、唯お姉ちゃんに任せなさいー。」

と言つ事で、唯姉＆僕VS憂姉の対決になつたのだが . . . . .

「強過ぎるよ憂姉！」

「もうちょっと手加減してね憂」

「お姉ちゃん達、だらしないなー」

結果は僕達のぼろ負け。憂姉強過ぎー。

その後もスイカ割りしたり無人島にしたりなんだといろいろした

「いやー楽しかったね、憂、優」

「うんそうだねお姉ちゃん

「ちゅっと疲れたけどね、遊び過ぎて」

「まだまだだね！優！」

何が？

「とにかくもう遅いし夕食を作るか」

「憂うお願い」

憂姉にすがりつゝ唯姉、立場逆じやね？

「いいけど……材料は？」

「「あつー。」」

と言つ事で3人揃つて買い物に行く事になりました。次回もよろしく！



## バカنسー！2（後書き）

次回は多分、澪ちゃんと律ちゃんの登場！お楽しみに！感想、アドバイスもよろしく！

## バカنسス！3（前書き）

バカنسス編。 今回は買い物に行きます！

## バカنسス！3

「うわ～結構広いなー」

「ここいら辺は結構有名らしいからね」

食べ物をまったく買つてなかつた僕たち、そのために近くのショッピングセンターに買い物に行く事になった。

「見て、見て～」

子供のよひにはしゃぐ唯姉、はぐれないかなー

「大丈夫？お姉ちゃん」

憂姉が心配してる。ホント憂姉は唯姉が好きだよな～

「大丈夫、大丈夫～」

そう言つぱつて唯姉一番危ないでしょ、絶対に

「お姉ちゃん可愛いなー」

と呟く憂姉、いやいや憂姉も可愛いよ（家族としてね！家族として！）

「優、私お姉ちゃん見てるから、買つて来てくれない？」

「いいけど、何を？」

「これとこれとこれ……」

「分かった、じゃあ行って来るね」

「言つて行こうとしたが

「お姉ちゃん、遠くまで行かないでーーー

ホントに世間好きたな姫は……

\* \* \*

「よし、これで最後だ」

と言つてやつとの事で、最後の食材をやつと見つけた、ってかどんだけ広いの?——。などと思つてみると

「えーい姫ーーー」

唯姉、呼ばれてるよー

「唯つてば、おーい唯どうしたー」

あれ？唯姉ここにいないよなーじゃあ誰？……って唯姉に見える人  
なんて……

「僕しかいないじゃん！」

「おっす唯」

力チューーシャの人が僕を唯姉と間違えている

「僕は唯じやないです！優です！」

「え？優なのか？ってかお前どんだけ女装好きなんだよ」

「違います！これはですねー」

「ハイハイ、分かった分かった

「自分から聞いて来たのにその態度はないでしょー！」

唯姉と同じで突っ込みポイント満載の人だな

「どうして唯姉と友達の人がここにいるんですか！」

問題はそこだよー

「私も聞きたいわ！」

「逆ギレ！？」

ホントに突っ込みポイント満載の人だな

「とにかく！私についてこい！」

「ちょっと耳を引っ張らないで……」

あと、買い物どうするんですか？と聞きたいんだけど……もうダメだ  
な……

\* \* \*

レストラン

「連れて来ただぞー」

「ほほ無理やりじゃないですかー！」

半ば強引にレストランまで引っ張られた

「律つちゃんナイス！」

「律、痛めつじやないか、離してやれ」

と、黒髪の人が言った

「あー」「ぬそ、『ぬそ』」

と言つてやつとの事で離してくれた

ありがと「いやこますー・黒髪の人さんー

「といひで澪ちゃんは何でっ・いじるるの?..」

「それはだなー澪がここに行きたい行きたいーって言つてきか? 「捏造すんな!」 ..... 軽いジョークなのに」

皿業自得だと思こますよ.....

「ホントはムギに唯達も行つてるから行つて来たらつて言われたから私も最初は断つたんだけど.....」

「私が澪の分までもりつたんだぜー。」

そう言つ事ですか.....

「といひあなた達の名前は何で言つたですか」

「あ、皿口紹介してなかつたつけ

「わづだな、今の内に皿口紹介するか」

「私の名前は田井中律一。軽音部部長で、アーティスト担当。」

「え？ 部長なんですか？！」

「ほー、優君やそれは喧嘩を売つてるとこい」といいんだね?」

やばつ！心の声が！

「いやね、律さんが部長なんて凄いなって」

「優、それ言い訳になつてない……」

「あ、ソウデスネ」

「覚悟しろよー優！！！」

と書いて襲われそうになつた時

「やめろ、律、何やってんだ」

律さんの首根っこをつかむ澪さん

「チヨーいじるどじうなるか見て見たかつたんだけどなー」

と言つて諦めてくれた。ありがとう黒髪の人さん！

「私の名前は秋山 露 軽音部ベース担当だ！」

じゅあありがとう二年生ー。毎さん！

「ヒーリング難、ヒーリング泊まつてゐるんだ?」

律さんが聞いてきた

「ムギちゃんの別荘!」

唯姉が答えた。

「ホントか! いいなー 私達なんて格安ホテルだぜー」

「じゃせなら一緒にくる?」

唯姉の突拍子な発言!

「えー! ホントか!」

「いいですよ、三人では広すぎますし」

「分かつたー! ジャあホテルの予約をキャンセルしていく

と黙つてこきなじダッシュ

「ヒーリングなんだ?」

と黙つて、残された凌さんの発言

「えーと「ヒーリングがつて信号を……」 ありがとひつひつ~

唯姉がおどおどしてると憂姉が答えた。流石は憂姉!

「あつがとひーじゅあわいへ行くからなー。」

やつはつて律先生を追いかかる瀧さんやつぱつ心配なのかな~

\* \* \*

「おーい優~律ちゃんたちが来たよ~」

「え? もう来たの?..」

やつはつて外に立てる僕

「おひやましまーか

「邪魔するなー。」

「「こりゃしゃーー」」

唯姉と僕が答える

「唯、憂さんは？」

「今、料理を作ってるよー」

「やつぱり唯は作ってないか」

ボソッと透さんが言ひ聞こえますよー。

「失礼なー私も作ったよー」

「おー・マジで?何を」

「「」のカレーにー」

「おーすげえー！」

いや、それは唯姉……

「カレーのルーを入れましたー！」

やつぱり……

「私の言つたすげえーを返せー」

こんなやつとり、またいつかあるような気がする……

「優君は何か作ってるのか?」

「僕も作りましたよー!」

「え? ホント?」

なんですか…その優君は唯に似てるー見たいな感じはーまあ確かに

「(このサラダ)アマトを乗せました」

……唯姉に似てるんだけどね

「やひばり唯に似てるな」「な

ハモって言われた……否定できないのだが

「おーすげえ!」

テーブルには豪華な料理がたくさん!

「気合入れて作っちゃいました」

憂姉が言つ、だけどホントにまたにつかほんなり取りあつそな  
感じがあるな……

「美味しこよ憂ーホントーー！」

「えへへーありがとうお姉ちゃん」

『でしてる憂姉可愛いなー（家族から見てね！家族からー！）

「こお嫁になれると思つよ憂姉」

「優もありがとー」

さりげなく憂姉

「肝試しを……やひつー。」

急な律さん発言ー

「僕は遠慮しますよ」

「私も遠慮しとく」

その答えに律さんは

「へへ優や澪はお化け、怖いんだー」

その言い方にちょっとイラッとしてしまって

「こ、み、やってやないじやなー。」

と言つてしまつた。裏で律さんがガツツポーズしてゐるのも氣づかず  
に。こんなシーンもいつかあるだろうなー、そんな気がする。と言  
う事で次回もよろしく！

## バカنسー！3（後書き）

次回は予定ですと肝試し編とあざにゃんとの出会いをやめてしまう！感想アドバイスもよろしく！

## バカنسス！4（前書き）

バカنسス編です！今回あずにゃん登場！すみません作者の文章力のなさのせいで、肝試し編はつきの話と言ひ事になってしまいましたホントにすみません！

## バカンス！4

「いや～暇だー」

ただいま浮浪者みたいに街中をうろついてます。まあこれも全て唯姉のせいなんだが

（回想）

「今日も泳ぐぜ！」

「おーっ…！」

律さんが泳ぐと言つのを待つてたかのように唯姉がおーっ…と叫ぶ  
最近毎日これの繰り返しだよ、まあ楽しいんだけど……

「あっ！」

唯姉がテーブルに足をぶつける

「大丈夫？唯姉」

「うん、大丈夫だよ」

唯姉は大丈夫、そうなのだが！

「僕の……水着……」

テーブルにあつた醤油がこぼれて水着にたれている

「あーーー！」めんぐメンー！」

流石に氣づきオロオロし出す唯姉。なんだかこっちが可哀想になつてきた…

「唯姉、大丈夫だから行つてきていいよ」

あーあ、言つちやつたよ

「ホント？」

途端にオロオロしていた足と手が止まり、涙ぐんだ田でこっちを見て来る。効果抜群だね、これは

「うん、だから僕の分まで遊んできて」

その言葉を聞き笑顔になった。この顔も効果抜群

「おーい唯ーなーにやつてんだ？」

律さんが唯に言つ

「大丈夫！今行くから。じゃあね優ー！」メンー！」

と言つて律さんの所に行つてしまつた。ちょっと待てー今日憂姉どつかに行つていないよー後澤さんもー、ビリじょ…

（回想終了）

「はあーどうするかなー」

と書いて行くあてもなく歩いてくると

「たい焼き食べたいなー」

目の前にはたい焼き屋さんが僕の食欲を際限なく誘つてくる。あーもう!

「並ぼう。」

残り少ないお小遣いを手にしてたい焼き屋さんに並ぶんだけど……

一  
まだかな  
上

並ぶ時間がとにかく長い!少し苛立ちながら待つていると

長いなー待つてる時間

あれ？後ろから聞いた事のある声がもしかして……

「梓さん？」

「あれ？ 優」

後ろに居たのはのは可愛らしい姿の梓さんが立っていた

「久し  
ぶり」

そう言つて梓さんが言つ

「うん、久しぶり」

と言つても夏休みの最初の頃に会つたんだけど……

「なんでここにいるの?」

と、梓さんが聞いてきた

「えつと……唯二……いや、お姉ちゃん達と一緒に」

「へー、そらなんだ、なんか偶然じゃないよ、うな気がするね」

「本当だね」

小説による非常に都合の良い展開だ、これは絶対

「なんか言つた、優?」

「いや、何も。といひて梓さんはここ?」

「家族で来たんだ、今日は一人だけだ」

「へー、僕と一緒にだね。今日は一人なんだ」

ホント今回は「都合主義満載だね……

そんな事を思いながらやつとの事でたい焼きを買つた。どんだけ人気なんだこの店……

「ヒーリング優のお姉ちゃんはギター上手いの?」

いきなり答えにへこ質問来ました！

「へ? つるまあ上手いと思つよ」

「? 何うなんだ」

なんとか誤魔化しに成功！ 良し

梓さんのホテルまで歩いてみると

「どうしたの?」

「へ? こやつ、何でもないよ。」

いや、何かあるでしょー。つい黙つて梓さんをしげりへ見ると

……カンペキ僕のたい焼きを見ているね。

「あの……食いつ。」

と言つてたい焼きを差し出すと

「ホント?」

と言つて皿を輝かせる、ヒーリングは唯姉とかなり似てるな

「あ……ありがとう」

そう言って僕のたい焼きを取って食べた途端に、梓さんの顔が笑顔になる。唯姉と憂姉と同じで屈託のない笑顔だな

「そんなたい焼き好きなんだね」

「クッと無言でうなずく梓さん。これはどんな人間でも100%可愛いいーと言う頷き方だね、絶対

「じゃあ、泊まってるホテルここだから」

「うん、じゃあねまたいつか

「うん、たい焼きありがとう」

と言つて帰つて行つた。余程たい焼きが嬉しかつたのかな……

\* \* \*

別荘

「ふ、待つてたよ優ー。」

と僕が帰ってきた途端に話しあす唯姉

「よしー！優が帰つて來た事だし始めよー！肝試し大会をー。」

え？本当にやんの？

「グループは私&唯と優さん&優&澪のグループでーす異議はありますか？」

「大有りですよー！律さんー。」

「絶対ダメだー。」

と言つて僕と優が叫ぶが

「異議はなしー」と言つて「

「「聞いてないだろー。」」

恐ろしいほどにハモつた僕と澪さん

「先にいってくる」

「人の話を聞け～！」

澪さんは粘るけど、僕はもう諦めた……

と言うわけで第一回！肝試し大会が始まったのだった



## バカنسー！4（後書き）

来週は今度こそ肝試し編です！△ギチャちゃんも出てくるんですよ！  
お願いします！

## バカنسー！5（前書き）

更新遅れてすいません！なにしろ林間学校などがあつてなかなか更新出来ずにいました。では気を取り直してどうぞ！

## バカنسスー5

「ホントにやるんですか？律さん？」

「あつたりまえだー！やんなくてどうすのー。」

「どうもしません」と、心の中で突っ込む。

「」は別荘の外れにある森。どうしてこんなに都合よくこんな森があるんだろう。流石「都合主義」最近たくさんあるな

「優！ 気合を入れて！ 大丈夫だよ優ならー！」

「ありがとう唯姉」

唯姉つてこんな時上有難いんだよなー全くその有り難さを他に回して欲しいよ……

「あー優照れてるー」

「へ？」

え？ 僕が照れてるの？ なんでだろう、見間違いないじゃないの？

「本当だー優照れてるぞー」

「律さんまでー！」

「私の言葉がそんなに嬉しかった？」

「唯姉までー。」

「私も照れてると思ひつ」

「澪ちゃんー。」

僕はまたもや唯姉と同じ事をしてしまったのか…………。

「「本当にこの3姉妹は照れるよな~」」

「姉妹じゃないです！姉弟ですー。」

律さんと澪さんの言葉にすかさず突っ込む僕。僕の立場つて一体…………。

「はいはい、そうだな~」

「直してくださいよー。」

そんな事を言つて皆に姉妹と姉弟の違いについて説明する。うん、分かつてたよー！皆が聞いてないのはー！

「ああ、優ーーわたると始めるぞー。」

僕の教えを無視して律さんが皆に話す

「ちよつと待つてよ律ちゃん、あれ見てー。」

唯姉が空を指さず。へ?こんな時にボケをかますのかな?唯姉

「あーすげえ！何だあれ！」

「律さんまでふざけないでくださいよ一分かっていきますよー嘘をついてるぐらー」

「嫌、違ひと思ひ。だつてあれ」

へ？澪さんまで、あー皆揃つてグルかー僕に嘘はつけ……

「……………」「……………」「……………」

五人揃つて声を上げる、皆は幻覚を見てるのか？僕はそう思つた。

「なんでこひちに飛行機が来てんの！？」

そう、こひちに見るからに自家用ジェットが近づいて来ているのだ！

「すげえ……」

今回の律さんのすげえにびっくりマークがついていない。それ程感動しているんだるーな

「あー別荘の近くに飛行機が降りたよ」

唯姉が別荘の方角を指で指す。まさかあの……

「唯、こんな事が出来そうな私たちの友達はあの人ぐらーしかいな  
いな……」

「そうだねー律ちゃん」

と言つた後、声を合わせて

「「ムギ（むぎーん）だ！……」」

ナイスなハモりだね。うん、僕もそう思つてたよ。だつてあんな大きな別荘持つているんだから

「唯一行くぞ」

「分かりました！律ちゃん隊長！」

そう言つて一人とも別荘へ向かつ。つてか律ちゃん隊長ってなんだ？……

「優、行こう？」

「へ？あ、うん

憂に言われて走つた

「ちよつと待つてくれよー」

と言つて遠さんの声が聞こえたのは氣のせいかな？

\* \* \*

別荘

「やつぱりムギちゃんだー」

と黙って駆け寄る唯姉とそれに続く律さんと遼さん。何か軽音部の人達が飛行機の前で話していると何かいい絵になりそうな気がするのには僕だけかな？

「あ、優ちゃん達も」

「「えい」「さわ」」

僕と優姉がおじぎする。ってかしないといけないような気がする

「あら~まだ優君は唯ちゃん似の髪型にしてるの~」

「ってかまるつき同じだけどな

律さんが呟くけど聞こえますよー!だがえてスルーしよう。またなんか言われたら面倒くさい

「えーとですねいろいろありますし、えーとムギさん?」

そう言えばムギさんの本名を僕は知らなかつた

「あー、やつは私の名前でなかつたわー。私の名前は琴吹 紗、  
ようしふく

「あ、はこよみじへお願ひします。紗さん」

そう返事をした。よかつた一言つてないと紗さんが忘れてたら  
どうしようかと思つた

「よーしー、軽音部全員と平沢一家が揃つたといひでー、肝試し大会を  
始めるだ〜」

と律さんが叫んで森の中へ入つて行つた

「あー、待つてよー律ちゃん!」

そう叫んで姉妹が追う

「えーとだな、ムギ……」

澪さんは必死に紗さんに今までの状況を伝えた。そのおかげで、何  
とか分かった顔をした紗さん。「苦勞様ですね

\* \* \*

森

「ではムギが来たところで…もう一度チーム発表だ!」

「どうせ、律さんが決めたに決まってる

「では…作者のコイン投げで決まったのは…」

「作者か…その発想はなかった…っていいのかこの話して

「唯&私&ムギと優&憂ちゃん&澪ーのチームです」

「はーはー…つてこれホントにコイン投げたか作者ー」

「因みに作者によればマジでコイン投げで決めたのでー…だそつだね

「ナリなんですか……」

作者を信じてやつてください

「つー」とで私達から行つて来るんで

「行つて来まーす」

「次、頑張つてね」

僕には今、全ての声が皮肉に聞こえた

「優、ビうしたの？顔色悪いけど」

「へ？だ……大丈夫だよーそれより澪さんは大丈夫なの？」

〔冗談混じりで言つたのだが

「ど……どひじょーべひじょー..」

完璧動搖してゐるね、これは僕よりダメかも

「澪さんより優なんて小学校でお姉ちゃん達のクラスがやつたお化け屋敷で氣絶して大騒ぎになつたじゃない

「へ？な…何のことじょか心当たりが全くない

「ホントかなー」

と、無邪気に笑つてゐる憂姉。この笑顔、僕は好きだな

「まあ行ひつよ優、ほら、澪さんも」

「ん？ああ行くか」

あれ？澪さん動搖が直つて……ないか足がかなり震えてる

\* \* \*

お墓

「ち……中学生にもなつて肝試しはねー」

「そ……そつだよな、わ……私達なんてもう高校生だし」

ただいま墓の最期の方らへん。恐怖がピークに達する所だ証拠として

「優、澪さん私の手が痛いんですけど」

と言ひ状況、憂姉の手は暖かい。ホツとする

「よし、もう少しで」——「キャハハハハハハハハ……へ？」

なにこの声死神の声？まさかのここで？え？ないない漆さん何か立つてじつとしてるおーい漆さん

「キャハハハハハハハハハハ

と言ひ声で木の上からてる坊主みたいな怪物が落ちて来た次の瞬間

「うわああああああああああああああああああああああああ」

僕は（多分漆さんも）記憶が途切れてしまった

\* \* \*

憂視点

こんばんは、平沢憂です。今は気絶した優と澪さんを見ています  
「ホントにこいつら怖がりだなーでかいてるてる坊主見たぐらいで」

「大丈夫かしら」

「大丈夫だよー小学生の時も大丈夫だったし」

お姉ちゃんだけ考えが違う気が……お姉ちゃんらしいな

「助けて……」

「氣絶したのに一人とも夢見てやがる」

「何か可愛いよね」

「ホントよね」

ホントに大丈夫なのかな……お姉ちゃん

\* \* \*

夢の中

「キヤハハハハハハハハハハ

「キヤハハハハハハハハハハ

「キヤハハハハハハハハハハ

「え？ ここ何処？ 唯姉一皆一」

「こ」の際誰でもいいから……」

助けて……マジでこれはもうダメかも澪さんしか近くにいない……

「「「「「「「「「「「キヤハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

「助けて――――――――――――

この二人の声は多分天まで届いたと思う。それくらい大きな声だつた。つてか誰か助けて――――――



## バカنس！5（後書き）

バカنس編も終わりに近づいて来ました。多分バカنس編も次で終わりです。今回は全く上手く出来た自信がないので、アドバイスなどお願いします

## バカنس！6（前書き）

バカنس編最終話です！これからは原作にそつて書いていきます（たまにオリジナル書くけど）

## バカنسス！6

「つこに今日は家に帰る口だね、ゆづー」

「そうだね、律さんと澪さんも帰っちゃったし紺さんなんて自家用ジエットで帰つていつたもんね」

「お姉ちゃんと優、喋つてばっかりいないで手伝つてよ」

今日は待ち遠しくもあつたし待ち遠しくなかった家に帰る口だ、といふわけで僕達平沢家は帰りの用意の確認をしている（とくに憂姉が）

「分かつたよ」

かといって憂姉ばかりに任せることは出来ないので、渋々重い腰を上げて僕と唯姉は手伝つた……のだが

「もうダメだー力が出ない」

すぐさま唯姉がギブアップ！ってかまだ一分もたつてないよね唯姉！

「しようがないなーお姉ちゃんは休んでー

え？いいのか憂姉！

「あー僕も急に胸が痛くなつてきたー憂姉休んで「ダメ！」……はい

くそー結構な演技力だと思ったのだけど即効で否定された！唯姉はホントに疲れたような顔をしている。唯姉は嘘をつけないタイプだからホントなんだろ

「ところで唯姉、あの肝試し大会のてるてる坊主は何処で用意したの？」

肝試し大会で僕と澪さんは恥ずかしながらも、笑うてゐる坊主に  
氣絶してしまつた。この記憶は永遠になかつた事にしたいのだけど、  
コレだけは聞いておきたかった。だつて氣になるし！

「あーそれはね、律ちゃんがあらかじめムギちゃんに電話しておいたらしいよ。律ちゃんはてるてる坊主を、ムギちゃんはあのせみのわるい声を担当した。つて律ちゃんが言つてたー！」

あーだから紺さんに遷さんが必死に説明してたのをすぐさま理解したのか成る程。という事はもともと分かつてたんだな、唯姉はあてるてる坊主の事を

「お姉ちゃん体力はもどつた？」

「はい！」の通り！

と言つて元気なポーズになつたのだが

「じゃああつちのゴリバ付けてくれない?」

と、憂姉が言つと

「ああ急に元気が……」

と言つて枯れた花みたいにばたり、と倒れる。どんだけ現金なんだ  
唯姉

\*\*\*

「ハア ハア」

「ギリギリセーフ！」

「ホントにギリギリだね」

今は掃除も終わり、新幹線に乗った所だ、しかし、この前には唯姉  
が掃除中に寝てそれにつられてみんな  
寝坊してしまつて遅れそうになつてしまつた。なので僕達三人とも

ダッシュして疲れ果てている

「唯姉そんなに体力あるなら……掃除やつてよ」

「もつともな意見だ100人中100人が疑問に思つと思つ

「それはね、私はいざという時にしか力が出せないです…」

と、声を張り上げ言つ、そこは声を張り上げるところではないと思つ  
うよ唯姉

「唯姉、自分でいつでも力を出せるために努力してね」

「分かつてるよー」

絶対に分かつてないな、唯姉

「まあまあ、乗れたからいいよ」

「」で上手く憂姉がまとめる、

「そうだね」

いつも通りの展開だ

「それにしてもいろいろあつたねー」

「うん、スイカ割りにショッピング、バレーボールや肝試し、そして泳ぎ泳ぎ泳ぎ…」

唯姉には泳いだのが一番楽しかったんだな

「ゆづーと優、またこれたらいいね」

笑顔100%で唯姉が言ひ、その答えに僕と優姉は声を合わせて100%の笑顔で言った

「「うん！ー！」」

この答えは今までの僕の人生で一番ハッキリとした言葉だと思つ

\* \* \*

「もうそろそろだね」

「うん、なんかす」く久しぶりって感じだね」

もう後五分で家に着く、そんな時

「ゆーつー君」

その声に振り返ると真司が見た事もない笑顔でたつていた

「久しぶり、突然だけどちょっと近くの公園までいいかな」

真司がおかしい

「どうしたんだよ、口調がおかしいぞ」

「まあとにかく来い？」

「ちょっと待てって！」

目が笑っていない真司に連れ去られて唯姉達を置いて行ってしまった。唯姉達はとすると

「人気者だね、ゆーつーは」

「ホントだね、先に帰つてご飯作るわ」

とか言って呑気に帰つて行つた、誰か僕の危険に気づいてくれる人は……いない

\* \* \*

「うわー皆」

真司に連れ去られて来た公園には僕のクラスメイトに他校の中学生がいた

「おい、てめえこの前中野さんと一緒にいただろ。たい焼き屋さん  
に」

他校の中学生が話す

「そうだけど、どうしたんですか？」

初めて話す人なので敬語で

「ほおーという事は平沢さんと遊び中野さんとも遊ぶ人か……」

今度は真司が独り言のように話す

「そりだけど、どうしたんだよ真司まで」

「わからないのか？だったら教えてやる」

今度は他校の中学生が

「それは我が校のアイドル中野さんと楽しく遊び！」

我が校のアイドル平沢さんとも楽しく遊んだよ

蟲の田に怒がりもるがよに」と、たいむかした

これがどういふ事なのか  
体で味あわせてや

近づいて来る真司達、僕も後ろに下がる

「ちよつと待て！中野さんは僕の友達だし、  
憂姉はお姉ちゃんだよ

一の必死の想な裏向達の心に想かず

「問答無用！死ね————！」

四〇

「助けてくれ——— ちょっと待て——— 話し合ひついで近づくな真司！——— い

その後公園に叫び越えが響いたのは言つまでもないよね！

## バカنس！6（後書き）

ついに終わりました！次の優は主人公補正で、怪我は治っているので心配しなくても大丈夫です！感想、アドバイスよろしくお願ひします

全く関係ないですけど唯のキャラソン『ギー太に首つたけ』っていいますよね！テンポがイイです！是非聞いてない人は聞いてみてはいかがでしょうか！

## 恋人♪恋！ 愛編1（前書き）

またオリジナルです。今回は一話完結。これ、ずっとやりたいと思つてたんだよなー

「優、入るよー」

「いじょ

紺さんの別荘から帰つてきてただいまちょうど一週間が経つた。正直言つて暇すぎるーそんな時憂姉が入つてきたのが始まりだった

「何？」

「えつと言いつらいお金貸して欲しいとか？」

「いや、違つんだけど……」

そつ言つて頬を紅くする。これ結構レアものじゃないーつ  
とそんな事考てる場合じゃないわ

「どうしたの？憂姉」

そつ僕が言つと憂姉が何かを覚悟したよつて田を明るくさせて僕に  
衝撃的な事を言つた

「恋人になつてくださいー！」

あーそんな事かい！…つて

いやー僕は夢見てるんだきつとそうだ。最近眠ってなかつたからかな?

「憂姉、僕達は姉弟だよ。確かに憂姉は好きだけど……」「

などと言つてゐると憂姉が口を開いた

「ホントに恋人になるんじやなくて、えーと」

「え？ そうなの？」

うん、  
実は  
……」

と言つて憂姉が詳しく説明した。要約すると、最近違う学校の〇君が付き合つてとしつこいらしく憂姉は私には彼女がいます！って言つたらしいんだけどじやあその証拠を見せてくれ、と言われたらしく頼れる男友達があまりいなくて一番信頼できる僕に恋人役を演じてもらいたいらしい

「あ！そんな事なら大丈夫だよ！」

と、僕が言うと

「ホントーありがとうございます」

と言つて笑顔になつた、

「因みに〇君は常に見ているらしいから」

「うん、分かった！」

「ここまでは良かったホントここまでは良かったが、僕は次の憂姉の言葉で言葉を失してしまった

「このメモを見て」

「何？」

と言つてメモを見た、すると

「…………」

「ちょっと、優！お姉ちゃん、優が倒れたー！」

そこから全く記憶がない何故かとこいつはメモにまで書いてあったからなんだ

メモ

公園でキス

\*\*\*

つてな訳でデート当日。最初に駅前で僕が待つてるとこいつ設定だ

「「めーん待つた」

おお、眩しい、眩しそぎる程の憂姉の笑顔

「僕も今来た所だよ憂」

初めてお姉ちゃん達を呼び捨てで呼んだ気がする

「ど」「行く?・憂」

と言つて手を繋いだ。なんか久しぶりだなこの感覚小学5年生ぐら  
いから恥ずかしくてやんなくなつたからなー唯姉はたまに今でもし  
て来るけど

「えっと、映画館!」

「分かった

そつ言つて映画館へ行つた。映画館は祝日だけあつて凄く混んでい

「なににする？決めていいよ」

と、僕が言つたのは間違いだつたかと次の瞬間後悔した

「あれにする

憂姉はホラー映画を指したのだ。いや、ホントに憂姉は僕をビリし  
たいんだろーか

「へ？…………うううん、いいよ」

「どうしたの？」

と言つて顔を近づけて言つ、ちょっと憂姉近いよ。近くにいる男子  
の目が痛い。ってか絶対分かつてるでしょ！

「行こーうーまだデートは始まつたばっかりだよー！」

と言つて僕の手を引っ張り映画のシアターへ向かう。そうだ、まだ  
始まつたばかりなんだよな。コレも憂姉の魔の手から守るため！  
頑張れ、僕！

「うんー！」

そつと憂姉の手を強く握りしめてシアターへ向かつた



## 恋人♪恋！憂編1（後書き）

はい、これ以上書くと文字数が多くなり編集の時大変になるんでここまでという事で。次回はついに憂とのデート本格編！ぜひ楽しみにしてくれると嬉しいです！では！

## 恋人ごっこ！憂編2（前書き）

今回で恋人ごっこ！憂編は完結です。けいおん！の原作に夏休みネタが少ないので次もオリジナルです。

「あ～楽しかつた」

「し……死ぬかと思つた」

ただいまホラー映画が終わつたあと、感想は怖かつた。うん、怖かつた途中で「うわああああああ！！」と叫んで前後の人達に睨まれてしまつた。そして憂姉に抱きついたりなど彼氏、彼女としては全く逆だ。男として恥ずかしいーってこれまでPG-12つてあり得ない！怖すぎだと思つ

「次どこ行く？」

憂姉が話しかけてきた。そうだった今デート中だった。デートに集中しないと！

「喫茶店とかどう？」

恋人と言えば喫茶店だと思つ……つて思つてるのって僕だけ？

「うんー。」

おお……凄まじい笑顔……眩しそうる

\*\*\*

喫茶店

「映画どうだつた？」

喫茶店に着いた途端この話題を出してきた憂姉

「え？……面白かったよー特にあのシーンとかが

と言つてゐるけど全く思い出したくもない映画だつた。大変だな……  
恋人役も

「へ～そなんだー」

憂姉！そこにやけ顔やめて！

「いらっしゃがイチゴパフェで、ござります」

しばらくすると店員さんが頼んでいたイチゴパフェを持ってきた

「うわ～ 美味しそー」

憂姉が声に出して感嘆している。ホントに美味しいそうだ

「はい」

いきなり僕の皿の前にスプーンが現れた

「あの…… 憂姉、これって…… なに？」

「何つて恋人同士だとこいついう事するのが普通じゃないの？」

「へえー そうなんだ」

つて出来る訳ないじゃないか！

「はい、アーン」

憂姉はずっと僕にスプーンを近づけている。憂姉ってこんな大胆な子でしたっけ？ええい！こうなりやもういいや。どうにでもなれ！

パクッ

「美味しいよ、憂」

最大級のスマイルで言つ

「ほんと？ ありがとう」

「いや、どうみても周りにはただのバカップルにしか絶対見てないよ！」

その後は、じつちがやらされて結構精神が持たなかつたよ。うん、危なかつた、食べるたびに笑顔を見せるんだもん憂姉

その後もゲーセンでプリクラを撮つたりなんたりと結構いろんな事をしたりした。結構いろんな事が出来たけどある事が頭の中から離れなかつた

それは公園でのキスだ。これを公衆の前でやるなんて僕にはそこまで勇気がない。しかも、姉弟で考へるだけで結構な恥ずかしさ

「もうそろ帰る時間だねビーチかいく？優

憂姉も流石に緊張してゐる見たいだ

「……公園でも行く？」

「...」

自分もなんだけどね

\* \* \*

公園

「どうしようか」

ただいま夜の公園。カップルが増えて来る時間だ。いくらか憂姉は落ち着いてきたらしいけど自分は全く落ち着けない

「と……どうあえずベンチにでも座ろう」

と言つて噴水前のベンチに座つたキスするためには絶好のポイントだと思つ

「えつと……」

言葉が全くでてこない。完璧に頭がパニックにおちこつてる。どうすればいいんだろう？

「お姉ちゃんの時みたいにいつもの調子で」

小声で憂姉がアドバイスしてくれた。いつもの様に……唯姉みたいに……よしつ！唯姉ありがとうー自信が湧いてきた！

「行くよ、憂」

「うんうん」

チユツ

唇……には出来なかつた（つてができる訳ないだろ？）ほつぺたにキスをした。いつものスキンシップだと思えば……流石にキスのスキンシップはした事なかつたけど出来た

「えへへ……」

やつをからげてしまつてゐる憂姉

「おい、大丈夫！」

ダメだ全く気づいてない

「帰るよー」

しょうがないな、おぶつて帰るか

卷之二

うう！一あれ「の感触が背中に頑張れ！俺の理性

はあ……憂姉をおふつて帰るのは初めてだな」

昔はよくおふくでもらつたつけ。憂姉は昔から世話を好きだったからなうみんな変わつてないんだね。変わつてる様に見えて

「ウニ」

「あ、起きた？ 夢姉」

「うん、あつそう言えばキスの事……」

「左のほうへたにしたよ」

「やうなの?」

そう言つて左ほっぺたをつねつたり触つたりしてゐる姫姉

「優、出来たんだねキス」

「うさ、えへへありがとう」

何故かテレる僕その時

チュツ

「へ?」

何かが僕の右ほっぺたに……

「えへへ、お返しだよ」

憂姉が僕の右ほっぺたにキスをしてきた

「帰る、優多分お姉ちゃんお腹空かせてまつてね」

さつきの事がなかつたかの様にする憂姉

「そうだね」

「早くこい」

珍しく憂姉が子供の様に走り出す

「ちよつー待つてよ憂姉」

そう言って僕は憂姉を追いかけた

因みにその後、Oは諦めたらしい（キスを見て）

\* \* \*

「今回私の出番なし?...」

「ジンマイ姉妹、次は出番あるか?」

「やうなの?...よし頑張るや〜

次回もよろしくお願ひします!.



## 恋人「」！～愛編2（後書き）

今回唯だせなくてすみませんでしたーー！次は唯活躍すると思んで  
よろしくお願いします！感想、アドバイスよろしくお願いします

## 宿題！（前書き）

夏休み編も今回で終わりです。次からは日常編に戻ります

## 宿題！

「あーだるこよー

「同じくー

「お姉ちゃん、優ぐーたらしないの」

ただいま夏休み最終日。凄くだるい日だ、ちなみに僕の部屋

「うー（ねえー）アイスちょーだい」

「だーめ朝からアイスなんて体に悪いよ

「えー

唯姉と声を揃えてブーイング

「全くお姉ちゃん達、しうがないなー

「えへへー

そして共にドレたりなんだりしたりした。あーこんな日がいつまでも  
も続けばイイな、と思つた矢先

「いてっ

タンスに足をぶつけてしまった。続いて棚の上から荷物が……

「ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ、ひさしぃ」

「いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ、いてつ」

どんびん上から荷物が落ちて来る

「大丈夫? ゆう?」

唯姉が駆け寄る

「あはは、何とかね」

そう、何とかだった

「あれ? これなんだ?」

見慣れない教材を取る。するとそこには……

「え? ま…まさかね?」

落ちて来た荷物をあさると色々なものが出て来たけど、ぼくの皿には数冊のノートしか映ってなかつた。その題名はといふと……

「これつてもしかして……あははは」

そう、全く手をつけてなかつた物……夏休みの宿題だつたんだ！！

残り時間二十時間

\* \* \*

「まず自由研究から……とな」

それから約三十分後、僕は机の上に有る10円玉に酢をつけていた

「よし綺麗になつた」

と言つて写真を撮る。今僕は時間がない時にやる実験の一つ「十円玉を綺麗にする方法」に手を出していた。憂姉は海に行つてる時やつたらしい。そんな時間あつたのか？頼んでも手伝つてくれなかつた。

唯姉はダメだ。絶対何も手伝いそうにない、つてか高校生つて夏休みの宿題ないのか？

「よし、後は醤油つと……実験終了！」

速攻で自由研究の実験を終わらせてたのだが……

「問題は……レポートだな」

大事なのは、レポートをどれだけ速く書けるかに自由研究はかかってるのだ！

「僕のペンを書く速さを見せてあげるよー。」

誰もいないのだが、まあそんな事はどうだつていいんだ

「ハアアアアアアア」

書くための集中をする、そして……

「ダアアアアアアアアアア」

持つてる力の全てを使つて書く、書く、書く、その時間三十分だったのだけど……

「あつー！醤油が！」

そう、近くにある醤油を「しましてしまった。ちょっとこれはヤバイ

「レポート全滅だー」

それから立ち直るのに一〇分もう一度書くの一時間、合計二時間

40分、残り時間17時間20分ヤバイ大幅にタイムロスト！

＊＊＊

「次は……美術か」

絵の具で絵を描くというよくある宿題、当然憂姉は見させてくれなかつた。仕方ないので、頑張ろうと思つたのだが……

「ダメだ！俺には描く才能がない」

しかし、約十分で現実逃避

「風が……心地イイな」

「優、現実逃避はダメだよ！」

「はつ…そつだ僕はやらなければ美術の宿題をしなきや！」

二十分後、現実に帰つてきた僕は一時間かけて（憂姉が手伝つてくれた）宿題を終わらせた

今回一時間三十分、残り時間十五時間五十分。結構取り戻したぜ！

\* \* \*

その後十三時間五十分かけて（5時間は寝てた）残り一つ。その残り一つが……

「日記なんだよな！」

そう、我ら中学生の天敵「日記」だつたんだ。これは終わらせようが僕には全くない。という事で、唯姉と憂姉に協力を頼んだ

「じゅの唯姉は快く了承してくれて憂姉は「しょうがないなー」と言つて手伝ってくれた。ありがとうお姉ちゃん達！」

「じゃあ僕は最初の一十口分書くから唯姉はその後の十日間、憂姉は最後の十口分やつてくださいー！」

「おーけーだよー」

「分かつたー」

唯姉はありがたいなーいつもならこんな時間に起きないのに手伝つてくれて。憂姉はお弁当作るとか大変なのに。いいお姉ちゃん達に恵まれたな、僕は

それから何とか全てを終わらせた僕、日記の内容?聞かないでくれると嬉しいな……

「終わったー」

「もう、手伝わないからね」

「もへ、こんな事はしたくないよ。とにかくありがとう憂姉」

「どういたしまして」

憂姉にお礼を言つ

「唯姉はわざわざ僕のために早く起きてくれてありがとう」

「えへへ～どういたしましてー」

唯姉にもお礼を言った。よし！これで準備万端！

＊＊＊

「真司君宿題を忘れるなんていけないなー」

「畜生ー...こいつが持つてくるとは思つてもいなかつたー！」

などと言つて学校で天狗になつていると

「ちょっと平沢君来てくれない？」

「はい？何でじょつか」

先生が呼んだので来ると口記を出された

「これ、じつは田口の手にハートマークとか書かれてるのかな？」

まさか……！ それって姉の書いたページじゃん！

「へ？ これは……ですねえ……『スー』と

「これまでお姉さんと一緒に書いた田口じゅんのかい？」

ウツーバレてる

「まさか～そんな訳ないじゃないですか」

「わ～……あくまで強情を張るつもりない

なことをする気なんだ？」

「姉さん聞いて下せー！」

そう先生が言つとクラスメイト全員がこの手を振り向く

「この平沢優君の日記にはハートマークが書かれていましたー」

え？ 先生はなに出すんだ！

「おこおこ～マジかよ優、やつまつさうこいつ趣味だったんだなー」

「真司～いつか殴るー」

その真司の声で周囲がざわめく。姉は「自業自得だよ」ってこう

目で僕を見てくる

そしてしばらく僕の嫌な噂と先生から目を付けられたのは言ひ今まで  
もないよね！

## 宿題！（後書き）

はい、という事で夏休み編終わりです。次は日常編＆学園祭編です！まあ学園祭編はしばらくしてからだと思いますけど

席替えー（前書き）

日常編のネタが思いつかなかつたので更新遅れました。後今回自信がない……すみません！もう、学園祭編に入っちゃおうかな……

**席替え！**

「ふあー あ眠い」

授業中大きな欠伸をしながら机で上手く寝ている僕、ホントにこの季節は眠くなるよね…………ハイそうですよ。僕はいつだって眠たいんです！そんな一人ツッコミをしていると

「それじゃあ平沢、この問題を解け」

憂姉、呼ばれてるよ~

「おい、平沢！」

憂姉も寝てるのかい？眠くなるよね～この季節は

一起きらばかヤローー！ー！ー！

「はつ！」

耳元で大声を出された。先生がやるなんて大人げないですよ

「全くお姉さんを見てみる、真面目にやつてるぞ」

憂姉は黙々とノートをとっている

「憂姉はテキるんですよ。僕と違つて」

「ハア……とにかくこの問題を解け」

「えーと、十一ですか？」

一応出してた答えを書いつ

「正解だ。間違つたら居残りプリント出す所だつたぞ」

そう書いて教壇に戻つて行く。あぶねえー書いてよかつた。

まあとにかく、そんな平凡な一日。唯姉が書つには最近軽音部に顧問が出来たらしい。つてかいなかつたのかよー顧問。

「やうだ、優」

「なんだよ真司」

斜め前のこれまた僕と同じ様に寝ていた（起されたが）真司が話しかけて来た

「今日は席替えがあるらしいぞ」

「え？ マジかー！」

そう、今日は席替えがあるらしい。僕としては嬉しい事だ！なんと言つても窓側の席が取れるかもしないし！後ろの席が取れるかもしないーまあ逆の可能性もあるんだけどね

\* \* \*

つてなわけで席替えの時間だ。まあそこらへんの男子や女子は「あ  
の人の後ろがいいなー」とか「あそこだけには行きたくない！」な  
どハイテンションで会話している。僕はと黙つと眠たいので寝てる  
……というわけにも行かないでの一応起きてるって感じ。ちなみに  
席替えはクジ引きで決めるらしい。最も簡単な方法だ。

「……とこり訳で今からクジ引きをするのでクジを引いても私たち  
が開けてもいいですよというまで開けいでください」

学級委員がそんな事を言つてる。そして男子は男子。女子は女子  
とクジ引きが開始された。……眠い。突つ込みどころもない。あ～  
暇だ～

「あーあ平沢さんと一緒にいいなー」

などの男子陣からの声が聞こえる。憂姉つてそこまでモテたつける？

「優、なんか言つた？」

横に怖い笑顔でいる憂姉がいた。つていたのか憂姉！

「じ……『冗談だよ』憂姉。あれだよ、アメリカンジョーク。うん。」

「ハア……すつゝく見苦しい」

「いめんなさい」

などと謝つていると

「あの……平沢君？ クジ……引いてくれない」

「あ、ゴメン、ゴメン」

と言つてクジを引く。開けちゃダメなんだよね

「平沢さんも」

「分かった」

そう言つて憂姉もクジを引く。番号何で書いてあるだる。他の男子  
だったら嫌だな……つてこれはシスコンみたいじゃないか！ 考える  
な僕！

「それでは皆さん、クジを一斉に開いてください」

その学級委員の声で一斉に全員がクジを開く。僕の番号は……よし  
！ 窓際だ！ しかも後ろ！ 絶対に寝れる！ 怒られライフをりば！

「それでは机を移動してください」

「超ハイテンションで机を動かす僕。横が誰なのか考えずに

「よひ、優」

「また真司か

「悪かったな。それよりもこれで俺たちは寝れるなー。」

「うん。」

的な言葉を話していたのだが……

「横の席だね」

まさかこの声は……

「憂姉？」

恐る恐る顔を出しあげると。そこには憂姉の姿が

「うそ、よろしくね。それと寝たり呪へから」

殺氣がいる憂姉。キャラ壊れてるよ

「ハツハツハツ残念だったな優！お前はもう寝る事が出来ない！」

「そういう真司もね」

決してこの声は僕ではないよ！」

「げ……純」

そこには憂姉の友達、鈴木純がいた

「真司、寝てたら叩くよ」

「ハイ」

ちなみに真司は純さんと幼馴染らしい。案外仲いいとか

「けど、大丈夫！まだ僕達には次の席替えがあるー！」

「ああー…そうだな」

とか言つてお互に慰めていると先生からさりに僕達をどん底に落とす言葉を言つた

「それと、これから席替えしないから」

「「え？」」

僕と真司の声が重なる

「これは私と学級委員が決めた事だ反論は許さん」

「反論は許さんって……先生大人げない」

つてそんな事言つてゐる場合ぢやない。これぢやあむづく僕達は授業中  
寝る事が出来ない！

「良かつたね～優

「良かつたね～真司」

憂姉と純さんが並ぶ。そんな訳でこれからは寝る事の出来ない授業  
と化してしまつた。これからどうすりゃいいんだよ……………！

「寝なあせこいじさん

「それはやうだけども…」

唯姉の学園祭も近い……（唯姉の事を考えて現実逃避）



**席替え！（後書き）**

全く文章力がない……

## 学園祭前一（前書き）

ついで今回学園祭前編です。

## 学園祭前！

唯姉の学園祭も近づいて来た今日この頃。いつものように唯姉とだけしている

「じゃジャーン見てよひつー」

「何それ？」

唯姉が何か書いてある紙を出して来た。あれは……歌詞カード？  
「これはね～澪ちゃんが学園祭の時用に作ってくれた歌詞カードなんだよー！」

澪さんが書いた歌詞カードか、そういうんでしょうね

「そこで！優二この歌詞カードを見せてあげよひつー！」

「ホントー！」

「はこ、どうだい

と言つて歌詞カードを唯姉が僕に渡した

「えーと

キミを見ているところもハートDOKI DOKI

何か変だな？

詰める思いはマショマロみたいにふわふわ

あれ？ 体が

いつもがんばる キミの横顔ずっと見てても気づかないよね

## 何か痒いような

夢の中なら 一人の距離  
縮められるのにな

あーっ！…………！ダメ！痒くてしょうがない！

騒ぐ僕、何処をかけても痒くてしようがない！メルヘンチックすぎるー澪さんってこういう趣味だったのか？

「大丈夫？優」

「なんとか、唯姉は大丈夫だつたの？」

「何が？」

「この歌詞だよ。痒く何なかつた？」

そう言って唯姉が痒くなつたと言つたと思つたその時

「全く、いい歌詞だと思ったよー。」

いい……歌詞？

「唯姉、一度精神科言つた方がいいよ」

「お姉ちゃんに対し失礼だよ優！だいたいムギちゃんもさわちやんもいい！って言ってたもん！」

「紺さんも？！ってかさわちやんって誰？」

「さわちやんは私達軽音部の顧問だよー。」

「顧問をさわちやんって……先生泣こちやうつよ？」

「細かい事は律ちゃんに聞いてー私は知らないー。」

律さんも相変わらずだな。ってか突っ込みポイント多！細かい所じやないだろ……

「まあそんな事は置いといへ……」

置くんかい！

「私がボーカルをする事になりましたー。」

「唯姉、ボーカル？！凄いじゃん！』

「えへへ～』

「だけど大丈夫なの？唯姉ギターと一緒に歌を歌つの苦手じゃん！」

そこが一番心配だ。

「大丈夫！今さわちゃん先生と特訓中だから！」

「そつかそういうや顧問がいたのか。なら大丈夫だねー応援してるよ  
唯姉！」

「ありがとう優ー頑張るよー！」

とか言つてたのこ……

\* \* \*

「いやー練習しすぎて声枯れちゃった！」

「ダメじゃー。」

「トクー、」

「トクー、じゃなこー。」

じつなるただ？桜校軽音部初めてのライブは……心配だなー

## 学園祭前一（後書き）

今回学園祭前一といいつ事で唯メインの話になりました。次回またや  
んと憂も出ますんで！では！

**学園祭ーー（前書き）**

ついにやっと来ました学園祭編ーーORIGINAL部分がありますので

只今、七時三十分

憂姉におひそれ、いつもはいるが今日は学園祭の下準備でいな唯  
姉を思ひ出しながらテレジを見てた

『「じ覧くださっこ」の紅葉ー秋が感じられますねー』

など言ひ男性アナウンサーの言葉を耳から耳へ流しつつ、座りなが  
ら一度寝をしてよつとしていると憂姉がテレジを消した

「あ……」

「ま、優そろそろ行く時間だよ?」

「ああそつだね」

と言ひながらも一度寝こまた入るつとあると……

ゴンシ

「痛つー!」

力強い憂姉の拳が僕の頭にダイレクトに当たった

「まじ優、一度寝はダメ」

「はーー」

そんな事を言いながら重い腰を上げる。さつかも書いたけど今日は学園祭だ。唯姉達桜校軽音部の初ライブもある。従つて今日は土曜日、何時もなら寝ている時間なのですごく眠たい。

「ほら、早く行かないと遅れちゃうよ？」

「待つて憂姉！今行くから！」

そう言いながら憂姉を追いかけて玄関まで向かう。しつかし唯姉、僕や憂姉より早く起きた事、凄い尊敬します、快挙だと思つよ！

唯姉が起きた後、憂姉が起きたのだけど『学園祭の下準備でもう行つてるよー！ライブ見に来てね！』と置き手紙を残して先に行つてしまつた。普通の唯姉ならあり得ない事なのだが、事実！それは起きた！これからはその事件を『唯姉事件』と名付けて心にしまおう！そう思いながらまたもや夢の世界へ入ろうとする僕

「ほり、優！」

「ちよつー！ホントに待つてー！」

そう言つて歩き出した憂姉を追つて僕も走り出した

\* \* \*

「ハアハアハア」

「何? 優、荷物運びでそんなに疲れたの?」

「そりゃ……疲れ……るよ」

僕は桜校まで荷物運びをしようと提案したのだが

「ボロ負けだもんね」

そう、全敗してしまった。何度も結果は何故か負けばかり。  
そのせいで、ずっと荷物を持つてるハメになってしまった。これは  
アレだ

「不幸だ……」

某上条さんの真似をしてみる。『上条さん顔負けの不幸をじやない?』

「ほり、荷物持つてあげるから」

「ありがと」

つて、自分の荷物持つてるだけじゃんー少しだけ期待しちゃった自分が恥ずかしい

「じゃあこれからは自由行動ねーライブの時間になつたら体育館前集合だよ」

「了解

そう言って憂姉と別れてパンフレットを受け取ると唯姉のクラスでは焼きそば屋さん、と書いてあった。お化け屋敷やりたい!って言つてたけど唯姉反対されたか……。

「まづ、そこに行くか

そう言って、長い長い唯姉最初の学園祭が始まったのだった



**学園祭ーー（後書き）**

感想、アドバイスは制限なしにしたのでどんどんくだせー！

## 学園祭ー2（前書き）

はい、今回は学園祭一回目です！優のキャラがおかしくなつて来た  
様な気がするのは僕だけなのだろうか。

「しつかし広いな」

桜校本校舎は私立というだけ大きかった。そう言えば僕って来年この高校に通うんだよな？まだ女子高だけだけど心配だ。何が起きるか分からぬ。多分唯姉がいる限り。途中でメイド喫茶と書いてある看板に誘われたが、僕も男だ！それくらいの覚悟は……

「いらっしゃいませ～」

全く出来てないです！いや、誰だつて男なら思うでしょ。「出合」が欲しい、と。このメイド喫茶に入つたら、それがきっかけで交際が始まつて終いには……へツヘツヘツなんていう変態的な言葉を言うのは「じままでにしよう。進展が全くない

「えーと、ここに書いてあるケーキを一つ」

「かしこまりました」

店員を呼んで僕が一番好きな甘いケーキ「ショートケーキ」を頼んだ、え？チョコレートケーキとかモンブランとかの方が美味しい？人生をもう一度見直した方がいい。ショートケーキの凄さに感動する事だらつ

まあそんな事を言って一人で脳内トークをしている可哀想な僕。暫くするとショートケーキが運ばれて來た

「あ、紬さん」

「あ、優君じゃない？何でーーー？」

ケーキを運んでいたのは紺さんだった。メイド服付きで。全く、メイド服なんて何処で買つたんだか、けしからんな。といつのは全くの冗談でメイド服万歳！唯姉が着たら似合うんだろうな。なんて軽いシステム発言をしつつ（決してシステムではないよ！）ケーキを口に運ぶ

「あ、美味しいです。紺さん」

「そう？良かつたー私の家から持つて來たからあまり自信がなかつたの」

ケーキを学校に持つて來るってどんな家だ！あつ！そつかー・紺さんは軽音部にティータイムを作つた主犯だからかつてそれでもダメでしょ！普通学校にケーキは持つて来れない！持つて來ていい学校があつたら連絡してくれ、速攻で転校するよー

「あつがどうぞこましたー」

そんな影ヅツコリをして、ケーキを食べ終わった後、紺さんに見送られつつ、今度こそ一年三組、つまり唯姉の教室に向かおう、と心に決めた

\* \* \*

僕が唯姉と会うために一年三組の教室に向かっていると

「あ、澪さん」

五三ごく先に澪さんがいた

「あ、優どうしたんだ？」

「唯姉を探しに行ってたんです。ところで、澪さんは？」

「軽音部室に行つたんだけど誰もいなくて……」

そつ言つて澪さんは顔を暗くした。唯姉…どうして軽音部室に行つて練習しない…澪さんというビューティフルガールが泣いてはいいな  
いけど、精神的に泣いてると思う人をほつたらかしにして…懲役五年は確定だよ！もちろん僕の法律だけど

「まあ、文化祭ですし、仕事でもしてるんじゃないですか？」

「やうかもしれないけど……」

「まあとにかく唯姉に会いに行きましょうよ、何か事情があるかも知れませんよ?」

「そりだな」

そう言って澪さんと一緒に文化祭に来てる男子共の視線を感じないのは、多分この自分が女子に見えるからであろう。自分で言つてて情けない……

「はい、いざながしゃ二段によがにね」

そんな事を考へると唯姉の声がした。あー、うー、一年三組なんだね！

「はい、一人前ね～ありがとう」

とか何とか言って焼きそばを私ていた。何だろ、唯姉が真面目に仕事しているこの風景つて

「一ノ瀬」

澪さんが唯姉に駆け寄る

「あー、澪ちゃん！ そして優ー、どうしたの？ 焼きそば買ひに？ ちよつと待つってね～」

唯姉、違うだろ……

「何でやつなるへ。アーヴィングもなくて今日せは本番だろ? めこつぱい練習しておいでよ」

「『えんね、わたしも練習したいんだけど、朝一はクラスの当番になつちやつて」

そしてダニ声、と思つた途端

ブーン

「あー、ブレー カーが落ちた」

「えー、また今日向度田よー」

「ちよつとーホットプレートだよー。」

「私達のクラスじゃないわよー。五組じゃないの?」

そしてグタグタである

「みんな大変そうだな。私、律のクラスも見てくる」と言つて去つて行つた。

「優はビーフあるの?..」

あ、そうだー僕はビーフすればいいんだ?

「優も手伝つてよー」

「それはダメです!」

「えー」

えーじゃないよ唯姉！僕は部外者です！

「あー和ちゃん！」

と、突然帽子被つた和さん登場

「大丈夫なの？その声」

全くである

「大丈夫だよ！部活で練習しそうやつただけだから」

「今日が初ステージでしょ？三時からだつたっけ？」

「うんー。」

「じゃあまだ時間あるし練習しておきたいんじゃないの？」

全くだー澪さんが困る

「え？でも」

「じゃあもう行つていいわよ？後は違う人に頼んでおくから

「でも迷惑が

「いいから、いいから」

「僕も練習した方がいいと思つよ？」

澪さんが困ってるしね！

「でも、でも

「行つて来なよ、唯

「ここは任せて

唯姉の友達も行つていいよと言つ。いい友達を持ったな。唯姉  
「うん！ ありがとう！」

案外簡単に納得してすぐさまギー太を背負つてダッシュして何処か  
へ行つてしまつた唯姉。それを僕と和さんが見届ける

「で？ 優はどこにあるの？」

「え？ 僕ですか？」

確かに唯姉が部屋に行つた今、何処へ行けばいいのか分からぬ  
「そうだ！ 唯がいなくなつたし手伝ってくれない？」

「和さん、それはちょっと……」

ダメです！ 学校の先生に代わりにこのテストの集計、やつとこでく  
れ！と同じくぐらー、いやです！

「冗談よ冗談」

「怖い冗談ですね」

「冗談が冗談に聞こえないのが和さんだと思つ。しかし……」

「いないわね～代わりにやつてくれる人」

「和さんが困つた様な顔でいう、これは……」

「誰かやつてくれないかしり」

と言つてこひらひ田をやつてきて来る。やつてくれと言いたいんですね、分かります

「分かりましたよ……やります」

「やつてくれるの？ありがと。じゃあお願ひね

「はあー」

ため息が出てしまつ僕。これは不幸フラグなのか？某上条さんみたいになつてしまつたのか？じゃあ恋愛フラグもたつのかな？

「バカな事は考えない方がいいと思つわよ？」

流石、心を読む和さんだな、全てが分かつてしまつ

「はあー」

もう一度深いため息をついて嫌々ながらもブレーカーがよく落ちる

ホットプレートを優しく使って、次の交代を待つた僕でした。

## 学園祭ー2（後書き）

ふいー終わった。ちなみにムギちゃんは出すタイミングが見つか  
らなかつたのでこういう事になつてしまひました……おっとー律ち  
ゃんは出るんで大丈夫だよ！ホントだよ！（汗）

学園祭ー3（前書き）

更新遅れてしまません！

中学生なのに高校生の文化祭の手伝いが終わり…………ってなんで僕は高校生の手伝いをしないといけないんだ！って今頃思つたつてダメだ……はあ

なんて思つてゐるとやつと自転車に乗れた小学生みたいな感じでふらふら歩いてる唯姉を見つけた

「おーい唯姉！」

「あー…ゆうー」

と言つて抱きついて來た

「ちよつ…抱きついてこないで！」

「嫌だー」

「だめ！ちよつ！視線が」

男達のしせんが――――――――――――――――

「うーしうがないなー」

と言つて別れてくれた。見知らぬ男子に殺される所だった。危ねえー

「所でなにやつてるの？唯姉」

「見ての通り！重いアンプを運んでいるのですー。」

「重そうに見えない…………って重ー！こんな普通に運べる奴…………」

その時、紬さんか同じ様なアンプを口笛を吹きながら

「「汗一つかかずに…………！」」

僕と唯姉がハモる紬さんはシャランラシャランラシと言にながら一つ目のアンプを運んで行つた

何あれ？サイヤ人？エヴァ？超能力？とにかく何なんだ！あれば！

「さあ紬さんを見習つて唯姉もスタートだよー。」

「へ？？？…………うんー。」

紬さんを見てからぼーっとしていた唯姉を起こしてアンプを持って歩かせようとするが……

「あーもう動けないよ～やうやく一歩つづく」

やめてー！その上上遣いー！僕はもうそのままその田には……

「僕がやるよ…………」

勝てない……

「ホント？ありがとう～」

と言つて重たいアンプを持たされて唯姉と同じ様な動きをしながら  
体育館裏まで歩いた

僕は……パシリなのか？パシリなのか？

\* \* \*

「あつ！和ちゃん！」

体育館裏には和さんがいた

「唯と優じゃない。今、演劇部が始まつたから端に置いといで……  
つて優が運んでるじゃない！」

いや、それ和さんも人の事、言えませんからー

「優が手伝ってくれたの！」

「ああ、手伝ったのね」

納得しないでください和さん。そう言って和さんは生徒会の仕事に戻った。今は……知らない人にこの後のスケジュールを教える。多分生徒会長か？この生徒会長が後に軽音部にちよつとした事件をもたらすのだが、これはまた別の話

「優！」

「何？唯姉」

「これから演奏だよ！絶対見に来てねー！」

「うん。分かってるよ」

「じゃあ、今度はステージで会おうねー！」

そう言って何処かへ行ってしまった。多分部室にこもどったんだと思う、何か……

「寂しいな」

そうつぶやき、体育館裏を後にした

\* \* \*

体育館前

「おーい憂姉！」

「あー優！遅いよーもー！」

「『メイソン』『メイソン』、こらこらと遅くなっちゃって」

また別のメイド喫茶に行つてたとは死んでも言えまい

「そろそろ始まっちゃうよー早く行こ」

「うん」

やつ言つて憂姉に手を引っ張られ体育館に入った

「私の出番なくね？」

「『メンなさい律様』出すタイミングが見つかりませんでした！」

「もつと活躍したいのに……全く」

「ホントすみませんでした！」

「

はい、最後の通り律ちゃんを出せず、すみませんでした。律ちゃん結構好きなキャラなんんですけど……すみませんとど忘れです。これからはちゃんととど忘れしない様気をつけます。

## 学園祭ー4（前書き）

今回は漫画の方が入ってる要素が濃いです。そして優がついいに男を  
すてます

「人が多いね」

うん、後ろで見てよっか

「そうだね」

今回の目的、学園祭の軽音部のLIVEを見に来てる僕と憂姉、客席が満員だったので、僕達は後ろにいたのだが……

始まる前から体が―――痒い！！！

「どうしたの？ 優？」

「いや、何でもないよ！今日はいい天気だね！絶好のライブ日和だ！」

などと考えもがいてる僕を変な目でみてる他の人に気づかず頭をかかえる僕は途中で自暴自棄になってしまった。もうどうでもいい

や……！

「憂姉！黄色のピン持っていない？唯姉が使つたのピンー！」

「え？持つてるけど……まさかあれを使つのへ？あれば優がもつ  
使いたくないって……」

「僕は僕の心と戦つて勝つた！！演奏妨害しないためにはそつある  
しかないんだ！」

皆さん思いの事でしょ？「変態か？」と、だが今の僕にはそんな事  
は考えてはいけない！僕自身こんな事をやるのは嫌だけど演奏妨害  
して睨まれる方が嫌だ！

「わ……分かつた」

そう言って憂姉は一つのピンを渡す。よし…髪の長さOK…・ピンス  
タンバイOK！行くぜ！…！

「俺がそんなふざけた幻想をもつならば…………俺は俺の幻想をぶ  
ち殺す！！！」

何処かのフラグたて野郎の真似をしてピンを一つ髪につけたすると

……

「憂お姉ちゃん！……！」

「ヤバイ！これじゃあ！自我が持てない！

「ちよっと優…こきなり……！」

「憂姉……僕の最後の言葉だ……演奏が止まつたらこのピンを外してく……」

最後に自分の自我を振り絞つて勇者の最後の言葉みたいな感じで言い放ち僕の心はついに自我が保てなくなつた

ちなみに僕は一つの黄色いピンをつけると唯姉と同じ性格になつてしまい、自我が保てなくなるというふざけた体質の持ち主。なんでこの体質は憂姉にはないんだ!と言つてもなつてしまつたものは、しょうがない。はあ~

「憂お姉ちゃんあつたかーい」

「えへへ、私もだよ優」

ちょっと待て!なんで憂姉は止めないんだ!（心だけは残つてる）

「さつー!そろそろ演奏の始まりだから離れよーね」

「はーい」

なんて純粹な僕なんだ……しかも周りの目を気にしないで……すげえぞ僕!

間もなくして会場が暗くなり桜ヶ丘高校の軽音部登場!……つてなんでみんな制服じゃないんだ?

「唯お姉ちゃんかつこいいね~」

「やうだねー皆かっこいい

「おーい唯お姉ちゃん！……」

「あーゆー…………」

そう言って僕達の存在に気づいた唯姉は手を振る……な……なんて優しい姉なんだ！

秋山さんはボーカルと聞いたなのに震えて動いていない。その時唯姉が

「澪ちゃん！私澪ちゃんが頑張って練習してたの知ってるから！絶対大丈夫だよ！頑張りつ！」

唯姉の声がマイクを通して聴こえる。ダニ声だがその言葉で気合が入った澪さん。ドラムの律さんを見る、そして……

「1！2！3！4！」

「君を見るとこつもハートドキ ドキ

大  
大  
大

演奏が終わった。全く痒くなかったので成果はあったようだ。拍手が送られる

「おーい唯お姉ちゃん！かつこよかつたよーー！」

だがこのままでは……」のままではまずい！自分の本拠地が敵にバレるよりましい！

「唯お姉ちゃん！！！大好k」

すかさず憂姉がピンを取ってくれたおかげで禁句を言いそつになつた僕は自我を取り戻した

「ふう……ありがとう姉妹」

「危なかつたね。シスコン呼ばわりされるとこりだつたよ?」

「命の恩人だ……ありがとうございます」

神のようすに憂姉を拝める僕。

「みんなーっ！…ありがとー！…！」

澪さんがそんな事を言つと、密席からキヤーキヤーとか何とか言わ  
れている。

だが帰らひつとした瞬間、澪さんがすつ転び……

「優ー見ちゃダメー！」

「え？何？何なの？何があつたの？え？」

「気にしないで…ああ帰らひつ優

「ちよつと待つて。力がつよ……うわああああ……」

引きずられて帰らざるを得なくなつた僕。出て行つた数秒後にキヤ  
アアアアアといつ澪さんの声が聞こえたのはきっと氣のせいだ。そつ、  
氣のせいに違いない。うん！その通り！…！

しかし何だつたのだろう。あの悲鳴の意味は。帰る途中何度も憂姉に  
聞いたが。顔を赤くするだけで答えてくれなかつた。

学園祭ー4（後書き）

次回は平沢家でなんかしますオリジナルストーリーで！多分、……唯の……何でしょうか？ほら、十一月といえばほら、あれですよ。ねえ、では次もよろしくお願ひします！

HAPPY BIRTHDAY 唯姉！-1（前書き）

誕生日編です！

## HAPPY BIRTHDAY 唯姉！1

わあ今日は何を隠そう唯姉の誕生日プレゼントを買つてだぜーー買つたなのだが……

「唯姉にプレゼントする品が決められないと……」

やつ、僕は優柔不断な性格なのでなかなか選べないので。ってな訳で

「お姉ちゃんのプレゼントを選ぶぐらい自分でやってよね？」

憂姉についてもりあつてます。去年も一昨年もその前もプレゼントが決まらなくて唯姉が喜ぶ事をしなきゃいけなくなつたんだよ！僕だって女装に耐性がなくなるのは嫌だ！だからこそ今年こそは唯姉にちゃんとしたものをプレゼントしたい！

「はーい」

てきとうに頷きながら憂姉に唯姉の誕生日プレゼントを僕の分まで貰つてくれたらなーなどとつ野望？を抱きつつ、憂姉と共に歩く僕

「どんな物がいいと思つ？唯姉の誕生日プレゼント～」

「うーん、お姉ちゃんは可愛い物なら何でもいいからなー。でも一番はお姉ちゃんに喜ばれる物をプレゼントするものが誕生日プレゼントじゃない？」

唯姉に喜ばれる物か……

「憂姉は何を買つたの？」

「秘密だよ」

「教えてよ憂姉」

「はい、はい。お姉ちゃんの誕生日にねー」

「意地悪だな憂姉は」

そういうながらも唯姉の誕生日の楽しみが増えたと思いつつ、何かいいものはないかなーと周りを観察する

「秋フェアが多いね」

「確かにね」

唯姉の誕生日は十一月一十七日、その一週間前にここに来ているので秋真っ盛りなのだ！

「秋ね～」

秋といつたら焼き芋！屋台で売ってる焼き芋はもはや神だ！美味すぎるー！一回食べて見たらどうだ？あー！でも屋台によつて味が違うからな～って話がそれでるぞ僕！

「秋と言つたら何だと思つ憂姉？」

「秋？うーん、何かなー、紅葉かな？」

「紅葉？」

「うん、木の色とか葉っぱの色とかが秋に大きく変わるからなんか印象深く残つてて」

「成る程……」

やつぱり憂姉の言つ事には納得できる理由が入つてるよな。しかし紅葉か……

「よし！僕は決めたよ！」

「何が？」

いきなり大声を出した僕にすかさず突つ込む憂姉。さすがにだね憂姉！

「今年の誕生日プレゼントをだよ！」

「ホントー良かつたじゅん！何々？」

「秘密でござりますよ」

憂姉も言わなかつたのに何で僕が言わなければならん！

「えー気になるなーー」

憂姉なら「うーんつけどもし唯姉なら『えー優の意地悪ーー』とか言つて僕は『意地悪つて理不尽なー』って言つてただろうな。なんていう事をのんきに考えながら

「よし！後はケーキを買つだけだね

「え？ 材料は？」

「また明日買つよ

「いいの？」

「うん。これはサプライズパーティーだからね。憂姉にも隠しておかないと」

いつも僕達の誕生日はサプライズパーティーなのだが、いつもつい誕生日という事を忘れてしまい、サプライズパーティーに驚かされてしまう。なんか変だけど、忘れてるなら忘れてるでいいんじゃないと思つ。だってそれこそ誕生日だと思えるから

「じゃあケーキを買おうよ優！」

「うん、行つ！」

そつと聞いてケーキ屋さんへ行つた

\* \* \*

符二家

かの有名なケー キ屋さんでいつもマスコットキャラクター「パチャ ん」の人形が同じ立ち位置に立っている。当然の如くケーキ以外も売つてゐる。僕達はここでケーキを買つつもりだ。

「どれにしようか、優」

「うーん、僕としてはショート「それは優が好きなケーキでしょ？」  
えー」

意見を言つ前に僕の意見は拒否された。まあ唯姉の誕生日だし、し  
ょうがないか。

「唯姉ってどんなケーキが好きなんだっけ？」

「うーん、チョコレートケーキかな？」

チョコレートケーキ……やっぱショートケーキだろ。唯姉は間違つ  
ている！ だけど誕生日だからなー

「しかしチョコレートケーキと言つても……」

「あんまりいいのがないね~」

ホントにこれ!と言ったケーキが見つからない。天下の符二家が何をやつているんだ!何でもケーキなら売つてんだろう!などという理不尽な意見を勝手に思う僕

「はあーないならしょうがない。ショートケーキにするかー」

などと憂姉が言つてる時に一つのケーキが僕の目に入った

「どうしたの優?」

「あのケーキ……」

ショートケーキでもチョコレートケーキでもないけど誕生日ケーキには相応しいケーキがそこにあった

「うわーすごいね」

憂姉も僕の方を見て感嘆する

「あのケーキならいいんじゃない?少々高いけどこれなら揃はないね」

感嘆に続いて僕が無意識に望んでいた一つの答えが帰ってきた

すぐさまダッシュして店員さんに「これをください!」と超ハイテンションで言った。店員さんはビビッてたけど別にいい!

その後、ケーキを僕が持つて家に帰る。唯姉は部活から帰つていな  
いはずだ

「ところで、優の誕生日プレゼントって何？」

帰り道、突然質問してきた憂姉に即答した

「秘密だよ

「えー」

憂姉は僕の答えに納得出来なかつたみたいだ。なら……

「憂姉の誕生日プレゼントって何？」

そういうと憂姉も

「秘密だよ

と言つた。交渉決裂だな。と思いつつ、来週の誕生日パーティーに期待を膨らませつつ思つた。

家帰つたら作るか。誕生日プレゼントってね



HAPPY BIRTHDAY 唯姉！ 1（後書き）

次は唯の誕生日パーティーです！

HAPPY BIRTHDAY唯姉！-2（前書き）

今日は短いです。今回、文章力が……ない。

## HAPPY BIRTHDAY 唯姉！2

今日は十一月一十七日。そう、運命の唯姉誕生日！

さあ僕！準備は出来たぞ！誕生日プレゼントの用意は出来た！今日は母さん達も帰つてくるし。遅くなるつて言つてたけど、来るだけいいさ

つてな訳で唯姉が帰つて来るまでに誕生日パーティーの準備中の僕。唯姉は食べ物の準備中。僕は色々と雑用をしてる。別に料理が出来ないつて訳じやないから！つてツンデレか？僕は

「そつち用意出来たー」

「大丈夫だよー」

唯姉の心配事をこれ以上増やさないように的確な返事を出して答える。いや、唯姉の楽しんでる所を邪魔したくないつて事だな

そんな事を思いながらテーブルを台拭きで拭く次の仕事に移る

しばらくして唯姉が鍋を持つてテーブルに来た。平沢家の誕生日は皆冬なので心があつたまる鍋にしている。他のもあるとかいふけど、平沢家の伝統みたいなもんだからな

「優、箸持つて来て」

「OKだよ」

箸を三人分用意しようとすると

「優、今日はお父さん達が帰つてくるでしょ？だから五人分」

「あつー。やうだつた

さつき思つた事をすぐ忘れてしまつた。これじゃ唯姉みみたいな天然な男の子じゃないか！氣をつけないとな

けど知らない所で神は言つていた「お前は唯と同じだ」って

まあそんな事を神が言つてるとも知らない氣楽な僕は色々とその後も雑用を任せられ色々やつてた瞬間

「ただいま」

唯姉の声がした。帰つて来たみたいだ。

「優」

二

僕達はケラッカリを持って影に隠れるそして……

パン！パン！

大きな音でクラッカーがなる。唯姉は

「え？ え？」

とか言って戸惑つてた。やつぱり忘れていたみたいだ。僕も人の事言えないけど

「お姉ちゃん忘れたの？今日は誕生日だよ？」

その憂姉の声ではア！とする。どうやら思いだしたみたいだ

「優、憂……」

そう言って涙目になる唯姉、僕の頭に危険信号が鳴り始める。何の危険信号だろう?と疑問に思つてると

「ありがと――！――！」

今度は飛びつきりの笑顔でラリア……いや、抱きついて来た。これで抱きついて来た手が僕の顔面に当たり

「痛つ！」

これが結構強烈だつた。痛い……

「大丈夫？ ゴメンね」

と言つて唯姉が僕の顔色を覗き込んで来た。近いです、唯姉

「いやいや、大丈夫だよ」

ホントなら、近いから離してくれ！唯姉何で言いそ�うだが、今日の

僕は違う！何しろ唯姉の誕生日だからね

「ホント? ジヤあ良かつた」

「そう言って顔から離れて行く唯姉。ちょっとドキッとしたのは秘密で！」

「じゃあ改めまして……」「誕生日おめでとう――――――」

「えへへ……ありがとう」

何だかいつも以上に照れてる唯姉。さあここからが本番だぜ！

## 今日の目標

唯姉の願いなら出来る限り聞く

唯姉に悲しい顔をさせない

とにかく頑張る

プレゼントを渡す

女装しろって言われてもあからさまにいやな顔をしない

出来るだけ頑張るぜ！



HAPPY BIRTHDAY 唯姉！-2（後書き）

次で誕生日編は最後です。

HAPPY BIRTHDAY 唯姉！-3（前書き）

更新遅れています！

# HAPPY BIRTHDAY 唯姉！-3

「今日は豪勢だね～憂」

「えへへ～お姉ちゃんのために張りきりました！」

テーブルに現れる料理は一流シェフが作ったんじゃないの？と思われる程の美味しさを誇った料理がズラリと並ぶ

「ホント今日はこつになく豪勢だよねー」

「ありがとう優」

テレる憂姉は新鮮だ。僕は結構この憂姉のテレが好き。もうひん唯姉もだけど

「そりいや～優、お願があるんだけど

「何唯姉？」

嫌な予感がする……

「ジャーン！これみて！」

出されたのは桜ヶ丘高校の制服だった

……着るんですね、わかります

分かりたくないけども！――！

「えへへ～これを優に着てもらいたいんだけど、ダメ?」

ホントは即答で嫌だ!と答えるのだが、今日は唯姉の誕生日だしその上遣いなので僕は……僕は……

「了解です」

「ありがとうございます優ー」

その笑顔だけで僕は何度も涙を流せる……

5分後何か足がスースーするスカートをはいて唯姉の所に戻る  
「似合つー似合つーすぎるよ優!」

「すいごーお姉ちゃんそのものだ!」

そりゃあ泣きたくなる言葉をどつも

「はい、最後はこれだよ~」

……＜アピング?

「唯姉!」……これは

「へ?私のへアピングだけど……」

禁断の道具きました！

「流石にこれは……ね、唯姉」

そつと聞いた時憂姉から

「今日はお姉ちやんの誕生日だよ

と、言われた

「やつかやつぱりダメだよね。優は男だ「イイよ」ほとんどー。」

そう言つた後ヘアピンを渡された。下手すりゃ僕ことひでの殺人兵器と化すこの道具

「優、ほら～これをつけたら私と同じだよー。」

私と同じだよ＝平沢唯＝女＝男を捨てる

ダメな方程式になつてんじやねえか！

ヘアピンは最早俺を女子にする道具だな。そういう道具はダラもんの道具だけで十分だ！

ええーいまみよー。

ヘアピン装着ー

「唯お姉ちやん！」

「わっ！優」

突然抱きつく僕。我ながら大胆な行動だ。ある意味感心するよ

「えへへ～唯お姉ちゃんにだきつくと気持ちいい～」

「うつちもだよ～優～」

ちょっと待て！羞恥心といつものはないのか…ぼくには感触が伝わ  
つてきちゃうんだよ！胸が……胸が――！！！！！

俺のＨＰは残り少ない！

「優だけずるーい！私も～！」

そう言って抱きついてきた憂姉。三人で抱きつく。いや、もう何か  
……回でも良くなつて来ちゃつたなー

そう言ってワイワイ抱きついているとき、新たなる刺客に僕は気づ  
けない……いや、忘れていた！

「…………何やつてるの？」

「…………母さん、父さん」

何かもうすんげー気まずかった。僕と唯姉は余り動じてなかつたけ  
れども……



HAPPY BIRTHDAY 唯姉ー3 (後書き)

次で本当に最後ー……になる筈です

HAPPY BIRTHDAY唯姉！-4（前書き）

更新遅れています！

他の小説に夢中になつて、この小説の次話が投稿できませんでした。  
ホントすいません！どうか見捨てないで下さい！

## HAPPY BIRTHDAY 唯姉！4

「「なるほど……」」

いやいや、成る程じゃないよそこにはいる親！

「ならいいんじゃない？」

いやいや。よくねーかー上めてくれ！

と、言ひ訳でお久しぶりです。平沢優です！

只今もう一人のボクに人格を乗っ取られています。けつして千年パズルとかそう言ひ類ではないけども！

このままじゅずつともう一人のボクのターンじゃないか！ずつと俺のターンなのは遊戯さんだけで充分だから！

「えへへ～唯お姉ちゃん」

冗談はここまでにしといでいい加減直さないとまずい。しかも唯姉のあれが当たつてるので、僕の意識は朦朧としている。やばいかもしれない……というかヤバい！！

とんだ誕生日パーティーになっちゃったよ……（僕だけ）

だが救世主は忘れた頃にやってくる

「お姉ちゃん。そろそろヘアピンはずしてあげたら？」

そう、僕の姉！我らが平沢憂です！

「そうだね。これ以上抱きついてると困っちゃうもんね」

「おおー唯姉分かってくれたか。これでもう一人のボクを出さずに済む。良かつた、良かつた

憂姉がヘアピンを外す。その瞬間、僕は解放感的なものを味つて

「ふう～」

復活！バッドエンドじゃなくて良かつた。バッドエンドはゲームだけで充分だ！

「ありがとう。憂姉」

「大丈夫だよ。私も優に抱きつかれたかったけど」

「……」

「もう抱きつきたくない……」

\*\*\*

てな訳で、その後も親達もまぜ、騒いでいると時間は速く過ぎて行くものだ。最後の誕生日プレゼントに移る

「じゃあまず、私達からね」

と言つて出したのは……

「自由の女神?」

アメリカの何処にあるか忘れたけど、通常より小さく自由の女神……あれ? 顔が……

「顔が違くない?」

唯姉が言つと母さんが

「いい所に気づいたわね唯ー。そつ、この顔は……唯の顔になつてゐるのよー。」

「え?」

もう一度確認してみると確かに顔と髪が唯姉だった

「私達で作ったのよ

「アメリカで、一人でね」

「アハハハ

「ウフフフ

「おお……あちらにピンクのムードが!

「じゃ……じゃあ次は憂姉のプレゼントで

「うん!これだよ!」

そう言って見せたのが……

「服か~」

僕からみればセンスのいいピンクのセーターだった。多分見た限り自分で作ったんだろうな流石憂姉

「ありがとう憂~早速明日から使うね

「えへへ~ありがとうお姉ちゃん

『れる憂姉。次は……

「じゃあ次は僕だね

で、見せたのが……

「あ！私のギター」

見せたのは唯姉の重いギター

「どうしてお姉ちゃんのギターが？」

「唯姉のギター汚かつたからさ。ギター店まで行つてメンテのやり方教えてもらつて自分からやつたんだ」

「新品みたいだ……ありがとう優！」

「えへへ、ありがと」

思わずテレてしまつた！

「ホント綺麗になつてゐるわね」

「うん。ホントに」

「ありがとう父さん達」

何時の間に、ピンクのマークはなくなつてた。あのマークがあるとやっすひー。

「では……四人で合わせて……」

「誕生日おめでたー。誰ー。..」

「みんなありがとう………」

因みに父さん達は翌日、中国に行きました

## HAPPY BIRTHDAY唯姉！-4（後書き）

実は最初の優のプレゼントは歌だったんですけど、歌詞なんぢやらで別のプレゼントに。納得出来なくても納得していただけないと嬉しいです

## 憂姉が家庭教師！

「オラは怒つたぞーフリーーザーーーーー！」

とか言つてる何処ぞの戦闘民族がいる再放送のテレビを見ながらおせんべいを食べていると、ある一人の少女が目に入った

そう、憂姉だ。リビングで静かに勉強をしている

状況説明が遅れたね！ただいま唯姉の誕生日が過ぎて一週間、やつと荷が降りたと思いつつゆつたりとしていた。因みに唯姉は部活中、因みに僕は立派な帰宅部所属だ。そう、立派な

「何やつてるの？憂姉」

「え？何やつてるの？……これだけ？」

ベネセの通信教材だった。あれ？何故にこんな物を？

「忘れてないとと思うけど明後日」

「明後日？？」

何だろう嫌な予感しかしないぞー！

「期末テストだよ

キマツテススト？

「そしてこれ

憂姉、僕をまたどん底に落とすつもりなのか・・・・!

「桜ヶ丘高校の過去問」

力ゴモン?

「優? 分かってると思つけど再来月は……

入試だよ?」

「あ……」

「優、まさか忘れ「勉強するぞーーー!」……優」

田にも留まりぬ速さで階段を駆け上り自分の部屋へ

ヤバイヤバイヤバイヤバイ!…………

再来月は入試で明後日は期末テストだって————!!

上条さん……この幻想をぶっ殺しちゃってください!

いや! これは幻想ではなく現実! ぶっ殺す事は出来ないんだ! クソ!

こうなつたら……

何しよ?

\*\*\*

てな訳で……

「憂姉～お願いします！勉強教えてください～。」

困ったときの～憂姉～

「ダメー！」うにうのは自分の力でやるものだよ。優ー。」

手厳しい……

「だって……だってだよー！最早憂姉に頼るしかないしー。」

「それでもー優、やり方だけ学んで理屈を学ばないじやんー。」

「そこをなんとか一憂姉様！」

「ダメつたらダメ！」

今回の憂姉は手強いぞ、きっと難易度最高のラスボス以上に手強い！メラゾーマじゃびくともしない！復活の呪文を何度も唱えれば……つて話が逸れてる！

「お願いします！憂姉！もう頼れるのは貴方様しかいないんだ！どうかこの無能な僕を救ってやってください……」

「ダメ」

「きっと憂姉に勉強を教えてもらつたら界王様の修行より学力がつくと思つから！」

「あれは武道でしょ！」

「じゃあ元気玉が……」「それも違つ……ハイ

怖えええ…………戦闘力がどんどん上がっている……バカな！

「ホントにお願いします。僕憂姉がいないと勉強が……」

「分かったよ、弟のためだし。仕方ないか

「ありがとうございます！」

「うつして僕は憂姉の弟子になつた！」

＊＊＊

「じゃあこの問題から……」

憂姉の部屋で勉強する事になり部屋へ向かい座る

「ここで大事件発生！」

集中出来ない！

理由はですね……

何故か憂姉から良い匂いがするのだ！いや、この匂いで俺の神経は壊れ始めている

何故だらう？いつもこんな事意識してないのに……やっぱり女の子の部屋にいるからか？とにかく大変な事になってしまったのだ、このままだとテストで良い点が取れず挙げ句の果てには中学浪人……はつ一ダメだ！どんどん考えが後向きになつていいく！

「優、聞いてるの？」

突然憂姉が心配のかんななのか、聞いて来た

「いや、ちゃんと聞いてたり聞いてなかつたり！」

ヤバ！ テンパつちゃつた

「ど、言ひ事は聞いてなかつたという事か～優？」

「ハイ、ナンデショウカ、ウイネエサマ」

我ながらロボットみたいな喋り方だな

「もう、分かつた、分かつたよ、優」

「何が？」

「私が入試まできちんと勉強を教える！」

「え？！」

教えたくないんじやないの？！

「優を見てると、いちが心配になつてくる。そこで手を止まらせない！」

「はい！」

こつして憂姉が家庭教師をする事に決まった

その幻想をぶち壊したい！

## 期末テスト！

今の心情はこうだ

ラスボスと、交戦中の勇者様！

ラスボス＝試験用紙で、勇者様＝僕だ

これでお分かりだろうか？

そう、現在期末テストと一対一の真剣勝負中だ。今のところ、憂姉のスバルタ特訓により僕の方が有利ってここだな

とこなはずだ……

うん、きっとそうだ……

きっとね……

んなワケねーだろーが！

いやね、確かにね、憂姉のおかげで勉強は普段よりいい方ですよ！うん！しかしね、それとテストというのは無関係でありまして、たつたの約3日間で、期末テストでいい点がとれるなんて富士山がエベレストより大きくなる事以上にあり得ないんだよ！

3日間とこいつ間に成し遂げられる事は……強くてニユーゲームをした勇者が魔王を倒すぐらいだけだぞ！

なんて事を考へている僕にはそんな事を考える余裕もないのだが、こうでもしないとテストに集中出来ないんだよ！

……ハイ、こんな事考へてもテストに集中出来ません。調子乗りました

今の状況は期末テスト最終日だ。最初は「僕は平沢優ではない！テ

ストを倒す者だ！」的なハイテンションだったのだが現在は「あー補習どうしよー」みたいな感じになつております

キンコーンカーンコーン

そんな楽しくない時間もいつかは終わりを告げる。このチャイムは僕達を救ってくれるチャイムだ

「それでは一テスト用紙を集めるぞ！」

先生の声で後ろにいる人が前の人間にテスト用紙を回す。自分も前に回した

「テストどうだつた?」

横にいる憂姉が聞いて来た

「へ？ い……いや、ハツハツハ出来たほ「出来なかつたんだね」

卷之二

「全く。大体優は三日前から勉強を始めるからいけないんだよ？」

「はい。平沢優、反省しております」

どうやら僕は憂姉に反論が出来ないらしい。当然と言つたら当然だけど

「はい、さつやと帰るー帰つたら次は入試の特訓と、補習についての勉強だよー」

「え？ 僕ちょっと休みた「勉強するよー」……ハイ

この展開は最早お約束じゃないか！

この後、憂姉のいつもよりつきつい教育で、次の補習のテストで百点取つちゃいましたー！ テヘー！

## 冬休み前！（前書き）

旅行中ひどい状態で書いた文です。大目に見てください

## 冬休み前！

僕は勉強が好きだ

例え憂姉に「今日は二次関数の復習だよ！」と、言われ。更には先生にも「宿題やらない奴は……分かってるよな？」と、脅されたとしても僕は勉強が一万二千年前から好きだし一億と二千年経つても勉強が好きだと思う！

んな訳ね！

誰だつて勉強は嫌いだろ？勉強が好きな奴は俺にとつて異世界人に等しい人間なんだよ！つまり……憂姉以外勉強好きは異世界人さ！涼宮ハルヒシリーズにでも出でろよ！畜生！羨ましい！

一万二千年前から愛してるのはアクエリオンだけでいいからーうん。  
そのどうり！

そんな訳でただいま冬休み前、受験もとつぐのとうに本格的となつた今、僕は不満気に勉強を解いてます。憂姉にしごかれながらも必死になつて勉強を解く姿はまさに勇者！勉強という名の魔王を超えた魔王に挑戦しようとチャレンジしてる平沢さんです

ちなみに憂姉は大抵の問題なら十秒からず倒せちゃうんだよー。モンスター

最強の勇者です

「さつやとーの問題解かないと今日の晩飯抜きだよー」

「笑顔で言わないで憂姉！」

キャラ崩壊してるよー！

もともとこんな事言わない人だった様な気が……しないでもない

そんな事を頭の半分で考えて残りの半分は勉強と言つの魔王を倒すためフル回転。結構キツイ。昔の復活の呪文を唱えるコマンドを押すぐらいめんどくさいだわ！

だがわからない問題は分からない。しぶしぶ憂姉のところに行き勉強を教えてもらつての繰り返しだ。因みに憂姉は俺が一問解くと三問は解いてる。流石僕の姉だぜ！と、言つと唯姉が悲しむので言わないのでおく

「これは、この問題のこいつがXになるから……」

憂姉は問題の解き方を言つ時、すごく分かりやすい。なんかもう全てを憂姉に任せちゃおつかな。炊事とか洗濯とか……つてもうやつてるんだった。改めて憂姉のありがたさを感じるぞ

「さつ言えば優？」

「え？ 何？」

突然憂姉が聞いて来た

「お姉ちゃんが今度私の家でクリスマス会やるから交換用のプレゼント買つといてだつて」

「え？」

一瞬目が点になる

「僕は約一ヶ月後受験だよね？」

「うん」

「何で〇×じりゅうたのめー。」

あの憂姉が！

「お姉ちゃんが可愛くって」

「……憂姉」

最早シスコンじゃない。これは恋愛感情だ！確かに唯姉は可愛いけども！僕は見なかつた事にしょー。うん。知らぬが仮だ。知つちゃつたけど

「だから、クリスマスまでにプレゼント買つといてね？」

「……え？」

「因みに来るのが和さんと軽音部の人達」

その夜、野口さんが一枚ぐらいなくなる事を覚悟した

## クリスマス会ー1（前書き）

今回、コメティー少なめです。クリスマス会つて書いてますけど唯達の過去編ですね

## クリスマス会ー1

「おお……」

何時の間にかクリスマスツリーが立てられていたのに驚きつつ、僕が幼稚園？で、唯姉が小学生だったころのHピソードを思い出す。

まあ突然だけど聞いてくれると嬉しいな！

「うーん、うーんしょ」

十一月二十三日、クリスマスイブの前日、唯姉と憂姉、そして僕とでクリスマスツリーを飾つていてそして最後、てっぺんを飾る時に唯姉はまだ小さかったので、クリスマスツリーのてっぺんを飾るのに、随分手こぎつっていた

「お……お姉ちゃん、大丈夫？」

「唯お姉ちゃん！大丈夫？」

まあ実のところ、自分は中一までお姉ちゃんと呼んでいたので、初

めて唯姉と呼んだ時は……「察しの通り、泣いて抱きついて来たのだが、そこが男の見せ所！心を鬼にして、押し返したのだよ！……まあ可哀想になってしまつて次の瞬間謝つていたのだけど……つて話が逸れたな。戾そう

「うん。大丈夫」

そう言つて足を伸ばす唯姉、今の僕なら確実に、全く大丈夫じゃないだろ！と、突っ込んでいたいところだが生憎、昔の僕は純粹に唯お姉ちゃんを助けよう！と思つたわけで、同じ事を考えていた憂姉と共に足を支えて、転ぶ運命から救つたのだ！

だがそんな勇氣ある行動に気づかなかつた唯姉に憂姉とと共にため息をつく

「今年はサンタさん来てくれるかな？」

突然、唯姉がクリスマスツリーを見ながら話し始めた

「私、宿題忘れたり、給食を食べ残したりあんまりいい子にしなかつたから……来てくれないかも、プレゼント、貰えますように！」

そんな事を言う唯姉。どうしてこんな細かく覚えているのか疑問だが、どうせ「都合主義」だろ！「うん

「大丈夫だよお姉ちゃん！サンタさんちゃんとプレゼントくれるよ！」

「うん！唯お姉ちゃんは僕や憂お姉ちゃんに優しくしてくれるし、絶対にプレゼントもらえる！僕が保証するよ！」

うん。我ながら口論。」それで、国民名詞賞受賞出来るぐらいいで  
決まった！（そんな賞はない！）なんて下心はなく、これは今まで  
も眞面目に思つてゐる事だ。憂姉にも唯姉にも感謝してゐる。

「憂も優もお願ひしといた方がいいよ」

そう唯姉が言つと、憂姉は聖母様みたいな感じに手を合わせて

「今年はホワイトクリスマスになりますよ！」……」

「「ホワイトクリスマス？」

僕と唯姉は声を合わせて疑問を持った声を出す。まあようするに知  
らなかつた訳だ

「雪が降つて真つ白になつたクリスマスの事なんだつて

「「ふーん」」

まあ要するに、この頃から憂姉はすごかつたつて事だ。その翌日こ  
の姉妹がある意味すごい事をしたのだが……

で、翌日

「憂…………優…………！」

朝、確かにこの時唯姉がこんな速く起きたのに驚いたんだよな

「速く速く――」

「お姉ちゃん待つて――――」

朝っぱらから階段をかけて、靴を履く僕達、疲れるよな。う。

そして唯姉がドアを開けたことは……

――雪国はなかつたけど木に雪がかかっていた

「ジャジャーン――」

「おおー」「

「ホワイトクリスマスだよ――」

と言つた唯姉の後、近づく僕達だが

「あれ?」

雪を触るが雪は溶けないし冷たくもない。憂姉も疑問も思つたらしく、首を傾げる

「唯姉ちゃん……これ……

そう言つと唯姉はクッショוןを出して

「クッショൺの中身――」

「え――」

やの口は唯姉は父さん達にたくせござられたとぞ

\* \* \*

「あははー。」

「どうしたよ優?」

「急に笑いだして、怖いわよ?」

「『メン』『メン』、思い出し笑い

とこう訳で回想終了。皆様、こんな無駄話に付き合ってくれてありがとうございました!

現在、和さんと唯姉と共に街の商店街にクリスマスのプレゼントを選びに行く途中、我慢しきれなくてついに笑ってしまったという事だ決して「ヤーヤ」してたりしてる訳じゃないよ！僕たちの事で笑つてたんだから！いや、マジで！

「何を思い出したの？」

「唯姉の事だよ」

「私の事？」

唯姉が首を傾げる。そりやそうだ

「ほら、昔唯姉が憂にクリスマスにクッショーン破つてホワイトクリスマスプレゼントしたじゃん」

「そんなことあつたっけ？うーん」

流石唯姉！覚えてないか！

「ねえーゅうー教えてー」

「知らない方がいいと思うよ

「え？ なんで？」

「なんでも」

あれは見方を変えれば知らぬが仏と言つてもいいほどのことだから

な。

「ほり優、唯。速く行くわよ

「あ、待って～和ちゃん！」

唯姉が走り出すのにつれて僕も一緒に走り出す  
プレゼント何買おうかなーと、思いながら



## クリスマス会ー2（前書き）

更新遅れてしません！

えーとですね、学校始まつたので、全くやる気が出ず、しかも夏休みの宿題が終わっていなかつたので、毎日夜中まで宿題やらなんやらして、終わつたと思ったら次は塾の模試があり、その勉強をしねばならない！ってな訳で昨日やつと模試が終わつたので、やつと書けました。

他の小説も書かねば……！ってか次中間じゃん！

「何か良いのないかな~」

ただいまクリスマス会に何のプレゼントを買つか検討中。唯姉は優柔不断だから選ぶのが長いんだよなー

……

まあ僕もだけどね!

どうして唯姉と憂姉はあんな違つのに唯姉と僕はこんな似ているんだ!僕は神を恨む!もしもボックスとかで、「もしも僕が唯姉と似てなかつたら」という世界を作つてやりたい!ドラえもん助けて!

まあ可愛いから許す! (姉弟として)

そんな脳内で、神様になんだかんだ言つてる間に唯姉は買つものを見つけたらしく、クマさんのぬいぐるみに抱きついていた

「私これにする~」

とか言つて笑顔の唯姉に和さんが一言

「普通、自分に当たつたらやり直しだよ」

「……」

無言でクマさんのぬいぐるみを戻して

「じゃあこれでいいや」

そう言って見せたのは昔流行ったたまごっちみたいな感じの親父のぬいぐるみだつた

「「ねこ」」

和さんと僕の突っ込みが見事に重なつた

\* \* \*

「やつと決まつた~」

そう言つてゐる唯姉と共に店を出る。因みにあの親父さんを唯姉は選んだ訳ではなく、知らないうちに買つっていた。因みに僕も選んだの

だがなんだかんだで、選ぶのに長い時間がかかつてしまつた。やはり唯姉と同じなんだなと悲しき嬉しく思つてゐると向こうに律さんと澪さんの姿が見えた

「あ、なんだー！ 唯達もプレゼント買つて来てたんだ」

律さんが声を出す。こつも通りの声なんて、こんな寒い田の中、お疲れさんです

「何買つたの？」

「それ言つたら楽しみがなくなるだろ？」

「あーそっかーえへへへ

100%澪さんの言ひ通りである。

「せりっせりっだ

とか言いながら律さんが紙を出した。それを僕達に笑顔で見せて

「ジャジャーンー！」これから抽選に行くんだ

ああ抽選の引換券なり……

「僕も持つてますよ。律さん」

「なつー！ 優達もか？ ふつふつふつといい勝負になつそつだぜ

「望むといひです

「ああ！優と律ちゃんの間にあのパチパチが！」

火花だよ。唯姉

\* \* \*

結果は……

「またティッシュか——」

「何度もティッシュが連續して出れば気が済むんだ……」

どちらも全部出たのは「白色」つまり残念賞のティッシュを貰った。

まあ記念としてとつておこうとは思わない。すぐ捨てよ。」のティッシュ・シュー君はきっと僕に残念だったね。君には運がないと言つ事だ。まあ頑張りたまえと言つて俺を見下す最低のティッシュ・シュー君なんだ！

「優、言い訳は見苦しいわよ」

「和也ん！」

流石読心術の天才だ。TVにでれんじやね？ほら「読心術の天才！高校生の真鍋和さん！」って題名で！

そんな時、隣の抽選会場で、鐘が鳴った振り向くと

「出ました！一等賞！」

な……なんだと……一等賞だと……どんだけ運が良いんだ……ってあれは……？

「ムギちゃん？」

そう、軽音部のお菓子をいつも持つて来る人、紺さんだった。ってか……

何あの運のよそ……！

自家用へりみたいなので夏休みに来て、何あれ？あり得ないだろ！

そんな事を僕が考えるとは知らない紺さんは僕達を見つけるとすぐこいつらに来て

「みんなもお買い物？」

「当たったの？」

「うん。ハワイ旅行だって」

そ……そんな事をスラリと言わないでください！僕のハートばズタボロだよ！

つてか何度も言つけど運よすぎだろ！

「でも辞退したの」

な……なんだって――――――――――――――――――――――

スラリと言つてスラリと辞退する。なんて謙虚な人なんだ！僕なんて意地でも逃がさないよ！

「こっちが欲しくてクリスマスに皆でやりましょ？」

出したのが人生ゲームだった……人生ゲーム……

ハワイ旅行と比べれば月とすっぽんじゃね？

そんなこんなで紬さんは僕達の驚きの顔に気づかないまま笑顔でクリスマス会の事を話すのだった



クリスマス会ー2（後書き）

感想や誤字など指摘してくださいー！感想はくださいー！お願いします！

## クリスマス会ー3（前書き）

更新遅れてしませんでした！次回は出来るだけはやく……出来た  
らしいな……

パチパチと肉の焼ける音がする。その音と共にいいくいも漂つて来る。よだれがでてきそうだ。うん。

「はい。これ持つてつて

「りょーかい

憂姉におひきりを持たされたので運んで行く。

今日は待ちにまつた運動会！――

……なんて事ではなく、今日はクリスマス会。唯姉の部活仲間と和さんも来るらしい。つてのはこの前言つたか。

と言う訳で、現在、憂姉と共に、食事を作ってる最中だ。とは言つたものの、僕は運んでいるだけなのだ……

まあ唯姉よりはマシか！

唯姉なんて片付け中だから。いや～あれだわ。姉の上に立つてるのは凄く気持ちいい事なんだね！

ふつふつふ……今の僕なら戦闘力53万野郎でもかてるぜ！――

そんな時。リビングのまづからパン！――とつ音が聞こえた。

「唯姉だな。サンドイッチをおへつこでに僕が見て来るよ

「あ、ありがとう優。ちょっと今手が離せないから」

おお……

なんだうつこの頬られてる感…やべえすげえ気持ちいい！何も言え  
ねえ！

つてな訳で気分がいいまま唯姉がいるリビング  
まで行くと唯姉がクラッカーを持ってそれを飛ばしていた。

「あつ！優」

「唯姉、掃除してたんじゃないの？」

「えへへ。つい……」

照れてる唯姉可愛いなー（姉）『ゆ

と、思いながら、テーブルにサンディッチを乗せると

「うわ～美味しそ～」

「憂姉が作ったものだからね！」

何故か身内に自慢する僕。誰得かつて？

僕得だ！！！

そんな事を思つてると唯姉がサンドイッチに手を伸ばそうとしてい

た！

「唯姉、ダメだよ」

我ながらいい弟だぜ！

結論としては、俺もつまみ食いしたいけどねー。こには弟としての意地を！見せてやりたいんだ！まあ作者は実際兄なので、弟の意地なんて分からな（以下、自主規制）

「つまみ食いなんてしないよー」

「やう？…ならいいけど……」

で、僕が後ろを向いた瞬間唯姉の方を向く

「ほつー！」

で、僕が後ろを向いた瞬間（「ゆ

「しなじつてばー」

で、僕が後ろを（「ゆ

（だ……ダルマさんが転んだ状態！…）

なんちゅうつ器用な姉だ！

「唯姉、遊んじゃだめー！」

僕、いつもとキャラ違うんじゃね？あれだ、これから真！平沢優だな。うん！

新じゃないからな。真だからなーーー！

「てへへ

「まだ全然片付けてないし。急いでね」

「りょーかいです！優隊長！」

「頑張ってくれ！唯副隊長！..」

で、唯姉はハサミと折り紙を用意して……

今から作る気か……

\* \* \*

暫くして……

ピーンボーン

「あー！はー！」

お、憂姉が出て行ってくれるか。僕は今、忙しくして、頼むよ憂姉！  
！！

「「「お邪魔しまーす」」」

「じりんわ

「やーいみんなー上がつてー

「おーいみんなー上がつてー

「何やつてんだ誰？」

「やつ出したいたがりなんくなつちつてー

「小学生かよーつてあれ？ 優は？」

「うーんありますよー

で、唯姉の横に現れる。まあこれで僕が何をしてたか分かるでしょうー。

「おまえら……二人共小学生か」

正解は同じ事をやつてたでしたー

いやね、唯姉が楽しくやつてたのを見てね。面白やつと不覚にも思つてしまいましてねーいや、別に唯姉と一緒にやううなどとは微塵たりとも思つてないし……（すんぐく長いんで省きます）

「あ、パートもらいます」

「あ、ありがとうございます」

「働き者の妹と……遊び人の姉と弟……」

「不幸なドラマが始まりそうだな」

こんな声が聞こえたがきっと氣のせいなんだろつ。うふ。

不幸なのは上条さん一人だけで十分だしね！

\*\*\*

「おおー 料理すげー」

テーブルに並ぶキラキラ光つた料理達。憂姉。シェフになつたら?

「憂ちゃんが作ってくれたの?」

「失礼なー私も作つたよ」

「僕も作つたよー」

「このケーキ!」

「このサンドイッチ!...」

「おーすげえー!」

ふつふつふ凄いだろ

「の上に母を乗せました！」

「を持って来ました！」

■ ■ ■ ■ ■

「私の言つたすげえーを返せ！」

「「え？ダメ？」

ダメじゃないと思ひー！

「あの。優とお姉ちゃん色々すごい頑張つてくれて。掃除しようとしてくれたり。飾りつけようとしてくれたりそれから……えーと

僕は凄くいい姉を持つた

「分かった。ゴメンね」

その「ゴメンねが同情に聞こえる僕。いや、同情なのか

「じゃあ和ちゃん遅れるって言うから先に乾杯しちゃおつかー」

卷之三

そのいきだ！元気だせ僕！

「うん！」

「能天氣な姉と弟と、健気な妹」

能天氣は余計です澪さん

「これはこれで、いい姉弟なのかもね」

「 かんぱー 」 「 」 「 」 「 」 「 」

七人の声が揃う、あれ? 七人?

「いや~ 今年も終わっちゃうね~」

「いやね~ 親父くさい」

「うふ?」

あれ? 真ん中に見知らぬおばさ……お姉さん(ただならぬ殺氣を感じた)がなんているんだ?

「さわちやん!」

「これ美味しいわ。おかわりもうえる?」

「 何時の間に? 」 「 」 「 」 「 」

さわちやんってあの?」の前唯姉が言つてた軽音部の顧問の?

「まさか、ロープをよじ登つ」

「窓から侵入して……」

「忍び込んで来た？」

「ちよつと一ひとをなんだと思つてゐるの？」

聞いたところでは、泥棒かと

「全く顧問を忘れてしおうなんでもないこう事?」

あいや。忘れてたうて訴じやないんすけど。

あれ？ 律さんの声が急にしほんて……そこまで強いのか」をわれた  
やん（仮名）は！

「先生は彼氏と予定があるかと思つて呼びませんでした」

ドンガラガツシャーン

なんだ！さわちやん先生の後ろに雷が！いや、イメージが！

そして、僕達が焦げてしまうというイメージが、なんでもありか！

「そんな事言ひのせ」の口か――――――――――――

泣きながら唯姉のくちを動かすさわちやん先生

「天然は……」

「凄い」

まつたくだ（お前もな

こうして新たなる人物が出てきたクリスマス会！いやもうどうなる  
なんてしつたこつちゃねーーー！！！

クリスマス会ー3（後書き）

感想是非ください！

## クリスマス会ー4（前書き）

いや、先週投稿するつもりが、その前の体育の授業が持久走でしてね。それで一年前より一分以上遅くなってしまって。これはヤバいくと、昔競り合つてた奴等とは比べ物にならない程遅くなってしまつた。ヤベエと、ってな訳でスランプにおちいつてしまつてですね。

なんとか立ち直つたはいいんですけど金、土、日と、結構走つたので疲れ果てて。で、投稿するのが今日になつてしまつた。ぜつたいに次は勝つ！！！

## クリスマス会ー4

「覗として唯ちゃんはこれに着替えなさい」

「なんでそんなの持つてるんですか」

何処から出してきたサンタ服をわちやん先生を傷つけた理由で  
突きつけられる唯姉、アンタはドラえもんか

「ジャーン」

なんでそんなすぐ着替えられるんだよ唯姉！

「ダメね」

だがそんな唯姉にわちやん先生はきつい一  
言

「唯ちゃんは恥じらいがたりないわ」

倒れこむ唯姉に憂姉は頭を撫でる。ほんとどっちが姉なんだか

……

べつ、別にやつてほしいわけじゃないんだからね！

「いりませ……やつぱり」

「ひつ……」

さわちやん先生が凌さんを見た瞬間立つて走る凌さんーそれを追いかけるさわちやん先生

「逃げない！」

「ひ――――――！」

悲傷様です

と、そんなひとや、

「五十九」

やべつ！和さん！

「んなとこを和さんみられてしまつたら……」

「」めんなさい間違えました

「間違つてないよ！助けて！」

ほら、ああ……

六

「なに憂姉？」

「ねえ優」

なんなんだこの2人のハイテンショソツ ぶりは

「十九」

! !

「それじゃあ気を取り直してプレゼント交換でもするか―――！」

の存在意義なくね？  
僕つて主人公なんだよね？ そうだよね？

だったら唯姉達の着せ替え相手になつてゐる僕はなんなんだ。  
そういうや、今回の話で初めてしゃべつたな。あれ？ そう考へれば僕

「アーマーです漆さん」

「もうお嫁にいけない……」

「高校生ってなんだかすごいね」

「うん、そつ、そつだねー。」

この人達などの特例だけだと僕は思う

「あつでも先生は？」

なんだかんだ言つて入つてきた和さんが先生がプレゼントを持つて  
いるか聞く

「私も持ってきてるわよ」

意外や意外、このさわちやんなる先生が持つてきてるとは。さわちやん先生のイメージが少しアップした！

「本当は今日、彼氏に渡すつもりのプレゼントだつたんだけど……」

「おもたいー!」「」「」「」「」「

「それじゃ、始めるわよ。」

みんなのテンションタウンのお勢いで始めるわたくし先生

みんなのプレゼントを集めてランダムに渡す

「歌が終わつたところでプレゼント」

カセットテープを持ち込んだのかと、思った僕はバカでさわちゃん先生、自身が歌い始めた

さわちゃん先生のイメージが大幅にダウンした！

あれだよ、アイマスで言えば即刻、オーディション落ちのレベルのイメージレベルだよ！今のさわちゃん先生！

そして、更に悪い記者がついて更にイメージダウン…いい事ないね！もつ旨様やる気なさそつな顔……いや、紺さんだけ笑顔だ！何故！何故なんだ！

「ストップ！-！」

そんな事を考へてゐる内にプレゼント交換は終わった。あんなのがずっと続いてたら最悪だな

「これ、あたしが買つたやつだ」

「ああ、じゃあ交換、交換！」

「あ、さわ子先生！」

何故か澪さんがさわ子先生を止めようとするが全く聞こえてないみたいでプレゼントに頬を寄せている

「とにかく良いものが入つてるような気がするわー。」

と言つて豪快に破いてプレゼントを開けた瞬間！

ビョーン

律さんのびっくり箱がさわ子先生にダイレクトアタック！！！

僕も含めてみんな一箇所に集まりブルブル震える

「ウヘヘヘ、最高のクリスマスだわあああ  
あああああーーー！」

目を輝かせてそう言つさわ子先生、ああ壊れたか。

「ウハ、ウハハハハハハハ

ちょっと、なにこれ、怖い

\* \* \*

「わあああ」

まず、綿さんがプレゼントを開けると、マラカスが！

「あ、それ私が買ったやつ」

透さん……マラカスって……メキシコ？

次に律さんが開けると、お歳暮……え？

今日ついて……クリスマス

「あ、それ私の」

「和ちやんお歳暮じやないんだから」

和さん、あなたはクリスマスをなごだと御つてゐるでしほうか?

で、その和さんが

「「いいなあクッキー」」

紺さんだなの?のプレゼントは。俺、それが欲しかった!

で、澪さんが……

「キヤアアアアア」

ベビメタですね、分かります

ちよつ……え?まさかそれを……

「彼氏に渡すつもりだったんですか?」「

……あ、

「せうよー悪かつたわねー

すこませんした

「あと、プレゼント開けてないのは、唯ちゃんたち三姉弟だけよね？」

「あ、そうだった、自分の事をすっかり忘れてた

「早く開けなさいよ」

「「「は、はー」「

さわちちゃん先生に急かされ、開ける僕達

で、唯姉と憂姉は……

「「「ああ

「お姉ちゃん……」「憂が

もつそつから2人の声が重なってよく聞こえなかつたけど……

僕つていつも仲間はずれだよな。これも運命? やつぱりオリキャラ  
だから…

ちくしょーー壁はたけえ！

「お互いのプレゼントが当たってなかつたらどうする気だつたんだ  
？」

「よかつた～

「ありがとう。憂

「うん。 ありがとう。 お姉ちゃん」

あれ? 目から汗が…… 気のせいかな。 影が薄い様な…… あれ? 僕つて主人公だっけ?

「で、 優は?」

「とこいつか優のプレゼント持つてる人いないよね」

「あ、 ホントだ」

待て…… もしかしてこれって……

「あ……」

自分のだ。 忘れてた。 律さんのときこづいてればー! あー! 不幸だ! 不公平だ!

僕に元気を分けてくれ! ! !

「で、 まあドンマイつていう事で。 なんなんだ? 優のプレゼントは

「これです」

そう言って見せたのは透明な球の中に入った雪と、 雪だるま

「ほりこれを軽く振ると」

そう言って軽く横に振る

「あつあつ」……」

「雪が上から降つてくるんです。何故なのかは分からぬけど」

「すいーーー」

我ながら良き物を見つナチャリタゼ。ケビン  
これをビーフシヨウ……あつそつだ！」

「はい、優姉」

「え? なに?」

「ほり、茜ホワイトクリスマスがほしいつて言つたじゃん。覚えてるか分からぬけど。自分が持つても仕方ないし」

「ほんと? ありがとう優ー!」

いやいや、それほどでもないですぜ

「ずるーい私も欲しかった」

唯姉がそんな事を言つたが、まあスルーで。いつもの事だ来年はなんかあげよ。うん

まつ、優姉が喜んでくれてよかったです……かな?





クリスマス会-4（後書き）

感想、アドバイスなどよろしくお願いします！

## クリスマス会ー5（前書き）

他の小説を更新再開したのでこちらの更新が遅れてしまいました。  
すみません

雑談ですが、僕は現在、ある事を忘れていたので後悔します。

それは……唯とあざにゃんの誕生日の事を全くにもって忘れていた事！

これは情けねえ！けいおん大好き人間として失格だよ！唯の誕生日の話を書いた自分が忘れるしあざにゃんの誕生日なんて「あつ、そつか！今日はポッキーの日か～」とか言つてポッキー食べながら二コ動見てた自分が情けない！

あ、もう俺つけてけいおん見る資格ないのかな……。映画も前売り券買つたのに……。いや、あるはずだ！きっと…

16日に発売されるけいおんのライブCDは絶対買つわ……ただでさえほぼ金ねえのに……  
来月は映画のCD買わないといけないし……なにこのけいおんラッショ！

つてな訳で前書き長くなりましたが、どうか本文も読んでやつてください

## クリスマス会ー5

「よーしー、じゃあ一人一人芸でもするか。」

「こんないい雰囲気を「その雰囲気をぶち壊すー！」的なノリでぶち壊してしまった律さん。

「良い話系の流れだつたのに」

「あ、澪が一番にやるかあ？」

「ひいー。」

「何処の親父ですか……」

「完全に親父ね……」

将来、ずっと笑えない親父ギャグ言つてそ�だ

.....

そりやないか

「じゃあ唯ー。」

「え？ 私？ うーん」

なんだかあたまをひねつてそんな顔で考へる唯姉。 そんなとき

「はい！ 私やります！」

憂姉が手を上げた

「えつ？ 憂？」

「この人が手挙げたの？ てきな口調で言わないでくれよ…… 実の妹だ  
る？」

＊＊＊

「ここにちは～メリークリスマス。みんな楽しんでますか～？」

パチパチパチ。

憂姉がやつた事はサンタとトナカイの人形で  
ペペツトマペペツトてきな。腹話術っていうのか？まあそんな事をし  
た。

流石万能なんでも出来ちゃう日本人グランプリ一位獲得の人物だな

注：そんな賞はただの主人公の妄想なので、実際そんな賞は出来ちゃつたりするかもしぬせんがほんとありえないのでは安心ください。

あれだな、本当は「私の仕事は平沢唯を観察して情報なんたらに報告する事」とか言つちゃつたりするかもね、それか「平沢唯のストレスが具現化してできる音人。それを倒すのが私の仕事です」てきな？それか「私はこの時間の人間ではありません。もつと未来から来ました」てきな？

そんな事はないと願いたいがね

「えへへ、すみません。こんな事しか」

「準備してたの？」

「お姉ちゃんが一人一芸だと言つていたので」

「えつー信じちゃつたの？」

「唯姉……何時の間に嘘を付く悪者に！」

「『めん憂』

「いいよ、気にしないで」

うん。姉妹愛が感じられるな。良い事だ  
僕、何処行つた！

「じゃあ私もエアギター、ギャッギヤーン」

「唯姉それはするいんじゃ……」「あ、じゃあ私もチャンチャンチャンチャ  
ンチャチャダダダダダダ」……おい」

ダメだ。この人達そう簡単に話を聞く人じやなかつた！

\*\*\*

「うーうーうー

出てきた瞬間、直ぐ逃げた我らが澪さん。まあそれもそのはず、サンタ服なんて着たら誰だって穴があつたらはいりたい気持ちになるだろう。

……

僕の姉以外

「澪ちゃん頑張ったね」

その姉が澪さんを褒めている。うん。これ恥ずかしがり屋（つてかあんなの着たら僕の姉以外全員恥ずかしがり屋になるだろ）が全員褒めてもじやあ貴方はどうなの？てきなノリになるから褒めるのは唯姉しか不可能だな

よく考えるとすげえな……唯姉

\*\*\*

「モノマネしまーす」

次は紺さん。モノマネつて「どうと何処ぞの『とつたど——』」言つてるとか歌真似で「うと合図とかかな?似合いそうだし。

だがそんな僕の予想は全く外れ、頭と首に手を変な形でおいて手を動かす

「な、なに?」

流石の律さんも分からぬ(いや、誰もわか

んねえだろ) モノマネ。いや、マジでこれなんなんだよ。

「マンボウでした~」

同級生だったり叶ひたひつ

『いや、なんだよそれー誰もわからんねえよー』

などと、だが相手は上級生なので……

「ああ、なるほど。確かに似てますね~」

と、棒読みで読むしかない！

「おっしゃー次行くわよー」

次はさわちやん先生。腹を出して手で呪を

「もみじー」

「……」

いや、もうなにも言えませんよ。なにやら粗さんと遼さんと律さん  
が涙を流しているが大丈夫なのだろーか?

「わーて。次は……」

「へ?」

何時の間にやら後ろに立つてゐる姉。あれ。なんだらう。あのペー

セツト?

「あ……唯姉？その手に持つてるのはなんでせうか？」

「大丈夫、だいじょーぶ。悪いようにはしないから」

「なんか、おかしいぞ、唯姉！あれか？ついにあの伝説の『パン』魔王」を食べてしまったのか？」

「そんな焼きたてジャパンに出てくるすきるパンなんて食べたことないよー」

「>>>」

最悪のこのキャラ替わり。ヤンデレ化！おめでとうござります！

つてか柔らかいアレが、アレがああああああああああああ

「裝着！！」

「あつ！」

変な事を考へてる途中に！－これはない！ああ、もう人格が……。

「唯お姉ちゃん……」

「あ、もう少しにたい。戻したいんだよ。

「おつー流石隠れシスコンと並んだといふかへ。

「こんな時に絶対に冷やかしに来そうつな律ちゃん。案の定来てしまったよ。

「律ちゃん実はですね」

「どうしたの憂ちゃん」

「―――」

「おつこいつ時に助けてくる我らが憂姉様。

「くつー優にそんな性質があるなんてね」

「優君つて不思議な子ね」

「男の子が女の子に……」

みんなわかつてくれたようだ。因みに漆ちゃん。僕、そんならんま2  
／1てきな性質持つてないんで、男に変わりはないです。強いて言  
えば「もう一人のボク」てきな、千年パズルないけど

「えへへ、楽しかつた～弟成分補給～」

「ハアハア。そりゃ……どうも」

因みにこの人格移動。多大な体力を必要とする。

.....

「冗談です。精神的なコトをどうにかしなきゃいけなかつたんで、つまりムラ……いや、なんでもないわ。うん。なんでもない

\* \* \*

「 「 「 お邪魔しました～」 「 「 」

ふう、疲れちまつたぜ。特に最後

「寒いね～憂、憂」

凍えながらも言ひづ唯姉、と、そんな時、

「あ、雪ー。」

「え？」

上を見ると、雪が降っていた。ホワイトクリスマスなんて、東京に  
こんな雪が……

「本當だ！ホワイトクリスマスだねー」

「お姉ちゃん。私達にホワイトクリスマスを  
プレゼントしてくれた事あったよねー」

「え？ うーん。憂も言ひたけど、うーん。本當、思い出せない

まあ僕は覚えてないほつが唯姉らしくてことと思ひたび

\* \* \*

「ふう……」

今日はいろんな事があつたな。こんな騒がしいクリスマス会初めてだ。

「ンンン

「はい?」

「わたしですよー」

ドア越しに唯姉の声がする。なんだろう嫌な予感しかない

まあ家族だし……いいか

「入つていよいよ」

セツヒツと、ドアが急に開き、

「突撃ー」

「うわーーー！」

嫌な予感的中！ダイレクトアタックを平沢優は受けた！！！

「しかも憂姉までー！」

気付けば横に憂姉がなんだこのシチュエーション。良い匂いしまくりで当たってるんですけど

「ちょっと、なんで入ってきたの？」

「いいじゃんたまには家族なんだし」

「それとこれとは……ハア」

まあいいか。

「今日はこれして寝るんだーあつたかいから

「私もこれして寝るんだーあつたかいから

「暖かそうでなにより

僕はないけどね！

「えへへ～貸して欲しい？」

「遠慮しとく。電気消すよ」

「はいはーい

パチ

その後、良い匂いがしすぎて眠れなく、しかも、布団を唯姉が全部  
とつてしまつて殆ど寝れなかつたのは訂正出来ない事実！



クリスマス会ー5（後書き）

なんだかんだでパソコンの優  
感想などお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1035u/>

けいおん！とある弟の人生

2011年11月17日21時24分発行